

上杉組太平記

naoyama1219

関東甲信越でも名を知られた上杉組、本家の朝は忙しい。

まず、跡取りである長男・景虎が養父が健在であることをいいことに会社に勤めているからであり、次男の景勝がまだ大学生であるためだ。もちろん組長たる謙信も起き出して朝食を採るため、上杉組の本家は三者三様の準備でばたばたする。

彼らの忙しさにするりと割り込んで、三者に見合った指示を飛ばして調節するのは居候の樋口兼続だが、この日も彼はご多分に漏れず、姿を見ては質問を投げてくる若い衆——といってもほとんど彼よりも年上だが——の質問に答えつつ、淡い白を基調としたストライプのネクタイを手には長い廊下を歩いていた。

風もさわやかな早春。

樋口兼続は高校二年生に進級したばかりだった。

誕生日が冬のため、まだ十七歳にならない兼続だが、艶のある黒髪を清潔そうに切りそろえ、切れ長の瞳の目元には明朗な人柄と意志の強さが透けて見えていた。

少年というには大人びた少年は屋敷の中を数百メートル歩いた末、渡り殿に目当ての人物を見つけ、ほっと表情を緩めながら早足で歩き寄った。

手に持ったネクタイを高々と掲げる。

「若さま、今日はぜひこちらを！」

「……なんだ樋口兼続。別にこっちでも良いじゃないか」

どうしても朝に弱い若さま——上杉組の跡目、上杉景虎は食べかけのパンを右手に、左の手に重そうな革の鞆を提げていた。髪セットは辛うじて間に合ったようでちゃんと櫛が入っている。そんなことをさりげなくチェックしながら、兼続はいいえ、と渋い顔で首を振った。

「今朝の会議は大事だと言っていたではありませんか。さすがに水色の水玉はまずいですよ」

「そうか？ 見ている人間など居ないと思うが。お前はいつも大げさなんだよ」

やくざの跡取り、という正体を隠しつつ、大手の製薬メーカーに勤める景虎は首をかしげながらもパンをくわえ、鞆を下に置いてネクタイを外した。兼続は素早く趣味の悪いネクタイを回収して制服のポケットに押し込み、代わりを渡しつつ、

「わかっておられないんですよ、若さまは」

そう、ぼつんと呟く。

聞きとがめた景虎は何かを言いたげにしたが、慣れないネクタイ——彼の高校は詰め襟の制服だった——との格闘に忙しく、またパンが邪魔で言い返せなかった。

どうにか形になったところで、兼続は手を伸ばしてネクタイの形を整え、ちょっと身を引いて背広との釣り合いを見る。

そう、確かに彼はわかっていない——景虎はそんじょそこらでは滅多にお目にかかれなほどの、美形、だった。

だが当人にはそういった意識がほとんど無く、ついでに服のセンスもきわめて悪く、この二つの取り合わせはまさに最悪だった。兼続も身なりにはさほど興味を寄せていなかったが、あまりにも景虎が悪趣味なので、気になって直していく内にすっかり詳しくなってしまった。

紺と言うには少し薄い色の、仕立てのよいスーツ。

上品なストライプのネクタイ。

はやりこの組み合わせが一番映える。

水玉のネクタイなんて売らないで欲しいな。

あとで捨てよう、と景虎が自分で買ったらしい水玉のネクタイを視界から隠しつつ、兼続はに

っこりと微笑んだ。

「ええ、よく似合っただけです。それでは気をつけて行ってらっしゃいませ。今晚はお早めにお戻りくださいよ」

「ああ、わかってるさ。養父上(ちちうえ)の誕生パーティだろう。早めに戻るよ」

酒さえ飲まなければ景虎はおとなしい。

かすかに微笑んだ姿が玄関の方に去って行って、兼続は「今日もまた若さまの体面を保てた」と安堵に笑みを漏らし、屋敷の奥に足を向けた。

途中、自分の部屋に寄って学生鞆を取り上げ、朝から走り回ったせいで額にうっすら浮かんだ汗を拭う。

(あとは景勝さまか……)

すでに組長——親分と呼ぶべきか、総長と言うべきか——謙信は朝食を済ませ、組の本部に向かっていた。今日一日、たぶんあちらで誕生日の祝いに訪れた傘下の組長や組員などと会うことになるだろう。

今年で四十八と男盛りの謙信だが、彼は養父から受け取った基盤を守り通すことに心血を注いでおり、宿敵・武田信玄が手を出してこない限りは一センチだろうと縄張りを広げたことがなかった。

その姿は「義を通す親分」という評判を得ており、堅気——いわゆる普通の人々——からの支持も厚い。

上杉組は広域指定暴力団の指定を受けていながらも、いまだ勢い盛んだった。

傘下の組も三十を超える。

「あの、樋口さま、大広間の畳、もうそろそろ替えていいんですかね？」

「……武田家から祝いの品が届いてるんですけど。塩が。山のように」

「新発田組からイノシシが届いてます！」

廊下を歩きながらいろいろと報告を受けつつ——いや、なんだってそんなことを報告するんだ——、兼続は急ぎ足で次男、景勝の部屋に向かった。

ふすまの前に立って、軽く深呼吸。

心臓がとくと鳴る。

屋敷の奥、ここまでは質問も報告も届かないし、喧噪もまた然りだ。

水を打ったように静かな廊下は気持ちを引き締めさせる。

兼続は大きく息を吸い込んで、声を掛けた。

「おはようございます、景勝さま」

今日は火曜日。

一限目の授業をとっていないため、次男、景勝はすでに起きていたものの、ベッドに腰掛けて書見に励んでいた。兼続が廊下に跪きながらふすまを開くと、本から目を上げた景勝は鷹揚にうなずき、目線が入ってくるように促す。

どこもかしこも純和風造りの上杉家の本家だが、景勝は布団に寝るのが大の嫌いで、彼だけが部屋にベッドを入れていた。その際に畳も絨毯に変えたものの、さすがに出入り口をドアには変えていない。

兼続は部屋の中に入ってその場に正座して、素早くふすまを閉める——下が絨毯なのでやりにくい、それにももう、慣れた。

重い学生鞆を脇に避ける。

景勝がさりげなく目で示した椅子に、軽く腰をかがめて一礼してから、腰を下ろした。

相対距離ほぼ一メートル。

——上杉景勝。

景勝は養父によく似て、落ち着き払った物腰でベッドに座って足を組み、手に開いた本を乗せていた。小作りの顔に表情はなく、身にまとったただの白いシャツとジーパンがとても清潔そうに見える。

まさに兼続にとって、`主、というべき存在だった。

「朝の挨拶が遅れて申し訳ありません」

兼続の目礼に、景勝は許す、とかすかなうなずき。

「今日のお加減はいかがですか？」

よい、とかすかなうなずき。

「今晚のことはお判りですね？」

もちろんだ、とかすかなうなずき。

いかにも寡黙な風情の顔には何の表情も浮かばない。

強いて言えば、読んでいる本が政治的なものなので、ちょっと厳めしく見えた。

「わたしは学校がすぐに終わって戻りますが、ちょっと遅れるかも知れません。お帰りはいつもと同じですか？」

そうだ、とかすかなうなずき。

「高校生なら制服で良いと思うのですが、さすがに今日だけは、紋付き袴でお願いいたします。……よろしいですか」

ちょっとためらってから、しかたがない、のうなずき。

兼続は少しほっとした。

半年以上前から必要を説いて説得してきたのだ、ここで嫌だと言われたら手の打ちようがない。

頭を下げつつ、立ち上がった。

「ではわたしは学校なので行きます。またのちほど」

「兼続」

いきなり名を呼ばれて、兼続は面食らいつつ、振り返った。景勝が口を開くなど一日に二度、あるかないかだ。

景勝は義理の兄ほどとは言わないまでも、端正な顔をかすかにかしげている。その姿のまま単調に述べた。

「何もないとは思うが、気をつけてゆけよ」

「……はい、ありがとうございます」

返した笑みがあまりにも嬉しそうに見えたのか、景勝もちょっと驚いたようだが、薄い唇の端をほんの少しだけ上げて、笑い返してくれた。深々と頭を下げた兼続はきちんとふすまを閉めてから、にやける頬を引き締めて玄関に急ぐ。

——これだから景勝さまと離れられないんだ。

無愛想に見えて、時折、ああいった言葉を掛けてくれるから。

今日は良い日になるかも。

慌てて玄関に並ぼうとする若い衆を手で押さえて、兼続は笑みを押し殺しつつ、綺麗すぎるほど磨き立てられた革靴を履いて玄関を出た。

薄曇りの晴れ。

午後には、雨の予報が出ている。

「おい兼続」

玄関から門まではだいたい二十メートル、重い鞆を片手に門までやってきたところでぐいと袖をとられて、油断していた兼続は体勢を崩した。よろめいたところを大きな手に支えられる。

驚きに目を瞬いた兼続は手の主を見上げ、微笑んだ。

「ああ、慶次か。おはよう」

そこに立っていたのは、北陸で勢力を伸ばす前田組から上杉組に「行儀見習い」という名目でやってきている、前田慶次(まえだけいじ)だった。

見習いという名目だが、実際は現在の組長、前田利家に死地に追いやられたというのが本当のようで、やって来てすでに三年になるというのに一向に帰る気配がない。

現在、大学六年生。

決して成績は悪くないのだが、「遊べる内に遊びたくてね」と茶目っ気たっぷりに嘯きつつ、どうも本音では実家からの送金を食いつぶすために学費を払っているようだった。このところは熱心にバイトに励んでいる。

慶次はとにかくでかい。

上背のある兼続よりもさらに頭一つ分背が高く、また素手の格闘技を得意とする兼続よりも身体の厚みは二回り以上あった。柔道と居合いを修めているにも関わらず、兼続に向かって緊張感のない笑みを向ける。

「ああ、おはよ。このまま行くと遅刻するぜ？ 送って行くか？」

「……バイクか？」

「そりゃそうだ、俺は車は持ってない」

兼続はクロノメーターの時計——景勝より高校の入学祝いにもらった——を見る。

遅刻ぎりぎりの電車の時刻まで、残り、十二分。

ここから頑張っても走っても十二分。

しばし考え、慶次にこっと笑いかけた。

「確かに間に合わないな。好意に甘えてお願いしたい」

「ふっはっは、あんたの言い方はいつも時代がかってるね」

慶次は朝からからからと大声で笑いながら兼続の背中を押し、「バイク、まだ出してないんだ」と言いながら車庫に向かう。脳裏で学校までの道を描いていた兼続はふと、玉砂利を踏みながら後ろを振り返った。

「なあ慶次、もしかしてわたしが来るのを待ってたのか？」

「待ってたといえば待ってたぜ。まあ、朝から謙信公に居合いに付き合えって言われてさ、バイトは午後からだし、時間あまっちゃったから。朝から三つは首を取られたかな」

「さすがの慶次も謙信公にはかなわないか」

差し出されたヘルメットを受け取った兼続はひどく嬉しそうだ。いつも表情を絶やさない彼ではあるが、今日はまた一段と楽しそうに見えた。慶次はかすかな苦笑を零す。

「まったく」

「安心していいぞ、慶次。謙信公には上杉組の誰も勝てん」

「兼続も？」

「わたしなど歯牙にも掛けてもらえないよ」

兼続は前髪を押さえながらヘルメットを被る。面倒見の良い慶次は兼続のメットをあちこち

かまって直してやると、自分も被り、ジーパンのポケットから取り出した鍵でバイクのエンジンを掛けた。

カワサキの250cc。

耳を聳すやかましい音に眉をひそめながら、巨体を器用に操ってまたがった慶次の後ろに兼続は恐る恐る乗る。

「何度も乗ってるが、……やはり慣れない」

「しっかり掴まれよ」

「……なあ、あまり飛ばさないで欲しいんだが」

「怖い？」

振り返った目があからさまに揶揄しているのを見て、兼続はむっと背筋を伸ばした。足を折り曲げながら教科書の詰まった鞆を抱える。

「怖くはない。怖くはないが、たかがスピードの出し過ぎで怪我をするのは馬鹿らしい。死ぬのもな」

一瞬、きょとんと目を瞬いた慶次が高らかに笑い出した。

「あっはっは、兼続の正論は正論過ぎて笑えるね。それでこそ樋口兼続だ」

眉を寄せた兼続は慶次のヘルメットを軽く叩いた。

「からかうなよ」

「……まあ、あんたのそういうトコ、好きだけどね」

なにやらぼそぼそと呟かれた声に兼続は顔を上げたが、指先で合図され、慌てて腰に手を回した。慶次は後ろの少年が体勢を整えるまで待って勢いよくエンジンを吹かす。

その昔、万葉集で鴨君足人(かものきみたりひと)が「桜花 木晚茂み 松風に 池波立ち」と詠んだ詩(うた)から、「松風」と慶次が勝手に名付けたバイクが跳ねるように上杉組の本家から飛び出した。一瞬後、残ったのはかすかなエンジン音。

その日の騒ぎは、まだ始まっていなかった。

というより騒ぎの中心、真田幸村は未だのんびりと夢の中に居た。

「今日は早いな、兼続。ひどい髪の乱れようだが」

教室に向かう廊下で同級生に後ろから声を掛けられて、兼続は振り返りつつ、頭に手をやった。変に固まってしまった髪を梳きながら「おはよう」と挨拶する。石田(いしだ)三成(みつなり)は制服のポケットから櫛を取り出し、「おはよう」と挨拶しながらいつものしかめっ面で使うように促した。

「今朝はどうしたんだ？」

「慶次がバイクで送ってくれたんだ。遅刻しそうだったからな」

後ろ髪を引っ詰めた三成はふうん、となぜか意味ありげにうなずいた。入学試験が満点だったという秀才の三成はいつも縁のないめがねを掛けている。

彼は始業前、ばたばたと走り回る生徒を眺めながらぐっと声を潜めて尋ねた。

「あの前田慶次か。まだそっちに居るのか？」

「帰るとは聞いてない。このまもうちに残るのかも知れないな」

ひっそりと交わされる組関連の情報。

礼を言って、兼続は使い終わった櫛を返した。

「だがそちらは別に前田とは関わりはないだろう？」

「……無いと言えは無いが、前田慶次といえば高校時代の武勇伝が有名だからな。親父殿が知りがるかも知れん。あの人は名前の知れた人間となったらすぐに欲しがる」

「羽柴の親分は傑物が好きだからなあ」

くすくすと笑って、兼続は三成の肩を軽く叩いた。

どこか人を寄せ付けない、冷やかな空気をまとった石田三成は、現在、上杉組と良好な関係にある羽柴(はしば)組の本家に居候していた。

それだけならば兼続と同じような立場に思えるが、彼の父親は代々、羽柴組の菩提を弔ってきた寺院の住職で、羽柴組の組長、羽柴秀吉(はしばひでよし)が才能を見抜いて手元で育てていた——現在は秀吉の下で若手の組員をとりまとめており、その手腕はまだ高校生だというのに評価され始めている。

どうも羽柴組の生え抜き組員とは仲が悪いらしいが、なぜか兼続とは馬が合った。

教室である二年C組に入ろうとした三成を兼続が引き留め、ふたりはドアを通り過ぎて隣の空き教室に入る。窓辺にそれぞれ身を寄せ、少し埃っぽい中、誰もいないそこでひそひそと呟きを交わした。

「それで三成、今晚、お前もうちに来てくれるんだろう？」

「ああ。親父殿と行く予定だ。ねね様が今朝から髪がどうか騒いでたよ」

「それは助かった」兼続は満面に笑みを作る。「若さまも景勝さまも居るんだが、どうにもああいう席は居辛くていけない。お前が来てくれるなら気が休まる」

「ふん、`狂犬の与六(よろく)、もパーティは嫌いか」

「——その渾名は止めてくれ」

一転してしかめっ面になった兼続はひらひらと手を振った。三成は悪戯心でさらに言い募ろうとしたが、不意に冷徹な色を宿した切れ長の目にじろりと睨み付けられて、思わず口を閉じた。

——時折、兼続はひどく怖い。

中学が違うので`狂犬の与六、と渾名された彼は知らないが、その一端を垣間見せられた気がして一気に胸が冷えた。しかし怖じ気づいた自分に気づいた三成は滲むように苦虫を噛み潰した

ような顔を作る。ぶいっと顔を背けた。

「だがそう呼ばれていたのは事実だろう」

「……若気の至りだよ、そう、あれは若気の至り。今は樋口兼続だ」

「高校生が若気の至りなどというな。似合わないぞ」

吐き捨てた三成の言葉に兼続が吹いた。

「はっはっは、何を言う、お前だって似たようなものじゃないか、三成。父親の口調が移ったのかひどく時代がかってて、時々、クラスメイトが目を丸くしているぞ。まだわたしは増しだと思っただけだねえ」

「——どちらも似たようなものだと思いますけどね」

突然、何の前触れもなくドアの向こうから艶のある声が割り込む。反射的にそちらへ足を踏み出した兼続だったが、慌てた三成に腕を取られて、わかっている、と囁きながらそっと空手(からて)の右手のひらを見せた。兼続は踏み出した足をそのままに、声の方へ歩き寄って勢いよくドアを開ける。

「直江船さん、立ち聞きはいけませんよ」

そこに立っていたのは直江船(なおえのせん)だった。

現在、高校三年生。

艶のある黒髪を背中まで伸ばし、まるっきり化粧っ気のない顔の中で赤い唇がずいぶんと目立っている。少々、十七歳にしては険と艶のある眼差しが上背のある下級生を睨み上げた。

「上杉家の居候さんも言葉遣いはちょっと変わっているわ」

「.....それはどうも」

低くなった兼続の声はどこかよそよそしく響いた。

「褒め言葉として受け取っておきます。何かわたしにご用ですか？」

「ええ。父から伝言です」

上杉組傘下筆頭、直江(なおえ)組(ぐみ)の組長の娘、直江船はかすかに頤を上げる。

その昔、謙信を魅了したと言われる母親から受け継いだ猛々しさを込めて、真っ向から黒みがかった目で兼続を睨み付けた。

「直江組は先例に倣って刀を送らせていただきました。研ぎが遅れたので鍛冶師が直接届けるはずでしたが、その刀、すでに届いておりますね？」

「.....ええ、昨日のうちに確認しております。見事な反りと刃紋の正宗(まさむね)でしたね」

「そう、それは助かりました。直接、父が謙信公に尋ねるわけにもいきませんから」

和服の着物が似合う仕草でゆるりと後ずさって、船は兼続を横目で見る。かすかな笑みを口元に乘せた。

「届いてないとなれば我が家の恥です」

「確かに預かっております。ご安心くださいと父上にお伝えください。——ひとつだけ、船どの、よろしいですか？」

立ち去ろうとしていた少女が目を戻す。

軽く目礼して見せ、兼続は傍目にも鮮やかな笑みを向けた。

「今晚は景綱さまと兄上の信綱(のぶつな)さまがいらっしゃると聞いています。あなたご自身は？」

「私は行きません」

素っ気なく、彼女は答えた。

「父から伝言を授けられたから尋ねただけ。今晚は忙しいのです」

「仙桃院さまが残念がるでしょう」

一瞬、船は返答に窮したが、すぐに対面を取り繕って心なしか背筋を伸ばした。彼女は兼続の脇にいる石田三成をちらっと横目で見やり、不愉快そうに鼻先にしわを寄せると、美しく空を向いた鼻先をつんと上げる。

「では」

目礼するなり豊かな黒髪を翻して、船が立ち去った。

その後ろ姿はそれまでの静けさとは打って変わって闊達だ。何気なく廊下を曲がるまで彼女を見送って、兼続は感情を押し殺した仕草でゆっくりとドアを引き、きっちりと閉める。

「おい兼続」

ふたりのやりとりを黙って見ていた三成が呆気にとられた声で漏らした。

「なんだ、あれは。確か直江組の船どのだろう？ お前、彼女に何をしたんだ？」

振り返って不満顔を見せて、兼続は眉間を狭めた。

軽くかぶりを振る。

「……いや、今のところこれといって何かをした覚えはないんだが、なぜか嫌われているんだ。若さま曰く、謙信公に想いを寄せていて、ずっと側にいられる居候のわたしを嫌っている、らしいんだが、……よくわからない」

三日前にあからさまに蔑んだ目で睨んだかと思えば、二日後に急に微笑んだりするのが、直江船だった。

女心と秋の空。

前田慶次曰く、どうにも兼続には荷が重すぎる、らしい。

兼続はせっかく梳いた髪を困惑にかき回しながら空き教室のドアを開けた。

「そろそろ行こう」

「ああ。……お前に扱えない女が居るとは予想外だった」

「おいおい三成、お前はわたしを誤解してるぞ」

「いいや違う。正しく理解しているのさ」

にやっと笑った三成は縁なし眼鏡を押し上げつつ、茶目っ気を交えて片目を閉じた。面食らった兼続は苦笑を浮かべて教室から出る。

「お前、わたしをいじめて楽しんでるだろう？」

「いじめ甲斐のある奴は好きだ。とくにお前はな」

「……だから友達が出来ないんだぞ？」

「お互い様だろう」

周りからすれば、まとう空気があまりにも違いすぎて、なんとなく近付きづらいふたりはそんな軽口を叩きつつ、朝の挨拶が飛び交う二年C組の教室に入った。

石田三成は一年生の時、生徒会長の大谷吉継(おおたによしつぐ)に書記に任じられて生徒会役員になっていたが、二年生に進級してからはどういうわけか影響力が増していた。

生徒会に入っていない兼続にはよくわからないのだが、今では昼休みの際、堂々と生徒会室に陣取るようにさえなっている。

いずれ生徒会長となるのは確実らしい——。

そんな噂もしめやかに流れている。

「すまん三成、遅れた」

一体、生徒会の中でどんな権力闘争が行われているのだろうと思いつつ、兼続は弁当を片手に生徒会室に入った。

すると生徒会長席に陣取った三成が手を上げる。

彼が受話器を肩と顔に挟んでいることに気づき、上杉家の居候は生徒会書記の前に座り、弁当を置いてゆっくりと両の手を合わせた。

彼の前にあるのは泣く子も黙る、上杉家組長・上杉謙信が姉、仙桃院(せんとういん)さま手作りの弁当——。

自らも養子であったため、上杉組の威信を守るのは血ではなく信念である、という考えのもと、謙信は妻をめとわずにふたりの養子を取った。そのため、長らく上杉組の奥向きを取り仕切るのは、出家しながらも弟の傍らにあった仙桃院の役割だった。

だがその彼女は今、長男・景虎の妻——そして、仙桃院の娘であり、景勝の妹——、上杉華美(はなみ)が生んだ病弱な道満(みちみつ)の面倒を見るため病院に詰めつきりになっている。

もう、一年半以上。

そのためにまだ高校生の兼続が上杉家に住み込む若い衆に指示を出すことになっているのだが、なぜか仙桃院は手作りの弁当という一点だけは、絶対に誰にも譲ろうとしなかった。

三時間目が終わると兼続は直ぐに下駄箱に向かう。

その頃になると弁当が届けられるからだ。

白い大判のハンカチを開くと、四角い白の弁当箱が姿を現す。万感の思いを込めてそうっと開けば、銀の輝きを放つ白飯の横、ウィナーにハンバーグにサラダに唐揚げにカニかまに——漬け物。

これは仙桃院が漬けたものに相違ない。

綿密な計算の上、鮮やかな配色で、詰められていた。

ふんわりと香の薫りが舞う。

「う～ん、いつものことながらすごい……」

「その漬け物をくれ。お前の好きなだし巻き卵、やるから」

いつのまにか電話を終えていた三成がそそくさと自分の弁当を取り出して、開く。こちらも羽柴組の極妻、ねね様の手作りだった。兼続は漬け物の半分を景気よく白飯の上に乗せてやり、きっちりだし巻き卵を二つに割って、取る。

食欲をそそるにおいが生徒会室に満ちた。

昼休み、残り二十三分。

グラウンドで騒ぐ生徒の声が窓の彼方から響いてきていた。

——いつもの、昼休み。

「いただきます」

声を合わせ、ふたりは合掌してから食べ始めた。

好きなものから食べる三成はまず唐揚げを食べ、すぐに漬け物を口に放り込んだ。ぽりぽり、とほどよい音を立てつつ。

「しかしずいぶんと遅かったな。誰に呼び出されたんだ？」

「国語の天室光育(てんしつこういく)先生だ。ほら、わたしは謙信公の影響を受けて俳句を詠むだろう？ それをどこかの賞に出すとか出さないで揉めてたんだ。——別に賞が欲しくて詠んでいるわけじゃないからな、嫌だって言ったんだが」

一つ一つ、味わいながら食べる兼続は幸せそうな顔のまま、ぼやく声で言った。三成は弁当を見つめたまましばらく黙り、和えたサラダに箸を延ばす。

「俺はお前の句は好きだから、出せばいい所に行くとは思うんだが……。ちょっと気障だが雰囲気は悪くないし……」

考え込む風情のまま顔を上げた。

「そういえばお前、真田(さなだ)のところの幸村(ゆきむら)と親しかったよな？」

「幸村？ ああ、……親しいというか、真田組はうちから武田に移ったからな、幸村とそのころの縁を切っていないだけだ」兼続は弁当から箸を引いて苦笑を浮かべた。「年が近いといえば近かったので、よく面倒を見た」

「今、中三か？」

「いや、二年生だ。三歳年下。精神年齢はもうちょい下かな」

いかにもうまそうな豆腐ハンバーグを食べながら、三成は仏頂面で肘を突いた。

「どうも近頃、上田(うえだ)の辺りでずいぶんと暴れてるそうじゃないか。この前、危うくうちの奴——福島(ふくしま)とか加藤(かとう)だが——が喧嘩を売られそうになって、警察に止められたらしい。そんな危ない奴なのか？」

「渾名が渾名だからなあ」

笑って、兼続はもらい物のだし巻き卵をそっと口に運んだ。うん、さすがねね様、おいしい。醤油にまで気を遣ってるらしい……。

「喧嘩っ早いことは確かだが、誰彼かまわず喧嘩を売るほど短気ではなかったぞ。組長の武田信玄(たけだしんげん)が幸村を気に入り、甲斐の若虎と名付けたとかなんとか……」

プルルル、とやけに初期の音を立てて、携帯電話が鳴った。

両手を使って箸を置いた兼続はポケットから二つ折りの青い携帯電話を取り出す。何気なく着信者の名前を見て、大きく眉を跳ね上げた。ちょっと巫山戯たような顔で携帯電話を振る。

「噂をすれば影が差す……。驚け、真田幸村からだぞ」

「ほう？」

「見事なタイミングだな。——はい、もしもし、樋口だが」

語りかけて数秒、戻ってきたのは空電音だけで、兼続はいったん携帯電話から耳を離し、再び押し当てた。用心深く「もしもし？」と繰り返す。途端、電話の向こうで「おお！」としわがれた声が上がった。

『出たぞ、山本勘助(やまもとかんすけ)。この声は間違いなく樋口兼続じゃ』

「——」

『聞こえておるか？ 樋口。わしは武田信玄じゃ』

驚きのあまりまったくわけがわからなくなって、兼続は携帯電話を耳に押し当てたまま固まり、呆然と一点を見つめた。

——武田信玄？ そう、確かに、この声は何度か聞いたことがあるが……。

ややあってようやく事態が飲み込め、兼続は椅子を跳ね飛ばしながら勢いよく立ち上がっていた。

「お前は武田信玄か！」

すると、電話は「いかにも」と、大儀そうに答えた。

かすれて聞こえづらい声で。

『主(ぬし)は樋口兼続じゃな。……ちと、頼みたいことがあるのだ』

「……頼みたいこと？」

なぜ武田信玄が？

一体、何がどうなってるんだ？

用心深くオウム返しに問いながら、兼続は指先で三成を呼んで、電話を聞くように促した。驚きにしかめっ面になっていた三成は音もなく席を移動すると、携帯電話にそっと耳を寄せる。

『なあ樋口よ』

武田信玄はどこか楽しそうな声で切り出した。

『主(ぬし)、今日は謙信の何度目かの誕生日であろう？ 実は真田(さなだ)組の幸昌(ゆきまさ)がな、謙信に祝いの品を贈ろうと考えていたのよ。そうしたら幸村がな、……では、俺が届けに行きますと言って、走って出て行ってしまったそうじゃ』

後ろの方では「あの馬鹿息子……」とか、「元気はいいお子さまなんですが」といった呟きが漏れている。たぶん真田幸昌と、流れ者の軍師、山本勘助の声だろう。

武田信玄は指先で拍子を取りつつ、声に笑いを滲ませて続けた。

『上杉組に知り合いがおるとか言っていたそうだから、たぶん主のところに行くと思うのだが？

樋口兼続よ。主も真田幸村のたちは知っておろう？』

「ええ……、まあ、嫌すぎるほど」

兼続の胸の中を嫌なものが満たしていく。

広域指定暴力団に指定されている上杉組の本家に居候していることを、兼続は担任教師以外の誰にも言っていなかった。それだって、言いたくて言ったのではなく、家庭訪問で知られてしまったのだが。

上杉の家に居候していることを恥じてはいない。ただ、面倒は避けたい——景勝に迷惑がかかるし、中学時代のこともある。

「真田幸村はこちらへ向かっているのですね……？」

『恐らく。携帯で連絡を取ろうにも、ほれ、このように携帯を忘れておるのだ。うちの誰かをやろうと思ったのだが、主は近くをうちの者がうろうろするのは嫌であろう』

「ええ、当然です。どうしても捕まえられないのですか？」

『やっではおるのだがな、目立つ割に見つからんのじゃ。その辺りの地理に疎いので迷っているのかも知れんが』

その時、何かに感づいた三成が身を離し、窓辺に歩き寄っていく。しかし兼続は気づかず、渋い顔でその場に突っ立ったまま、ぐるぐると思案を巡らせていた——たぶん幸村のことだ、あの猪突猛進中学生は問答無用で最短距離を突っ走ってくるに違いない。誰も通らないようなビルの隙間とか人家の庭とか墓場をさくさくと横切って……。迷子？

「兼続！」

「っ！」

突然、三成が切迫した声で叫んだ。一瞬、立ちすくんだ兼続は手招きされて窓辺に駆け寄り、目を細め、思わず窓ガラスに手を叩きつける。

居た！

真田幸村！

真っ赤なハチマキを巻いて校門で仁王立ちしている！

『兼続、どうしたのじゃ？』

「——失礼、これから猪……いえ、虎を狩りに行かねばなりませんので」

『虎？』

間の抜けた声を発した携帯電話の通話ボタンを、兼続はぶちっと容赦なく押した。すでに三成は身を翻してドアから出て行っている。ここは三階。一瞬、窓を開いたがさすがに飛び出せず、兼続は「ええい！」と時代がかった呟きを吐き捨てて三成の後を追った。

頼む、三成！

あの猪をどうにかしてくれっ！

私立、春日山高校。

真っ赤なハチマキを翻しつつ、息を切らしながら赤い顔で校門前で立ち止まって、真田幸村は腕の中の贈り物を抱き直した。よし！ 我、到着せり！ あとは兼続どのを探すだけだっ！

——とはいえ。

この学校は広そうだ。

いや、うん……、間違いなく広いぞ。

校門の前には広々としたグラウンドとそこを取り囲む木々がまばらにあり、奥の左手に校舎、右手に立派な体育館がある。何となく気圧されてそろそろと歩いた幸村は、中学二年生にしても小柄な身体に急に力を漲らせ、胸を張った。心なしか額に結わえたハチマキも元気を取り戻す。

こうなれば名乗りを上げるが良し！ そう、それが手っ取り早い！！

「校内の皆様にお尋ねしたい！」

幸村はまだ声変わり前の甲高い声で叫んだ。昼休み、校門付近の木陰で休んでいた生徒がぎょっと目を上げる。

「この高校の二学年に、義理堅く高潔で知られる上杉組の——」

「オラ中坊ッ」

背中に小石を当てられて、幸村は振り返った。

——そこに巨漢。

「お前、真田ンとこの幸村だろ～。ウチのガッコに何の用だ？」

肩の辺りまで無造作に伸ばした髪を引っ詰め、真っ茶色に染めた高校生が居た。あごにもっさり蓄えたひげから見てもとても高校生には見えないがたぶん高校生だろう。——だって、制服、着てるもの。

幸村が浮かべた不審に、たぶん高校生らしい生徒はしかめっ面になった。

「お前、もしかしてオレを知らねえのか～？ オレは小島(こじま)弥太郎(やたろう)、この高校の三年生だ、上杉組にはちょっとばかり世話になってる。中坊にゃ～鬼小島(おにこじま)つつたほうがわかりやすいか？」

「おお！ あなたが小島——ぶっ！」

額に何かの直撃を食らって、幸村は口を閉じた。

真っ白に砕けた何かがはらりと舞う。

「この間抜けどもめ、学校の校門前で真っ昼間から何をやっている。俺の学校で騒ぎを起こすな」

「——チッ 石田三成か」

右手でチャラチャラとチョークを弄びつつ、生徒会書記、石田三成がふたりの傍らに立った。生徒会にはあまり良い思い出がない弥太郎が嫌そうに名前を呼ぶ。一瞬、ぽかんっと口を開けた幸村は聞き覚えるある名前にキランっと三角眼を輝かせた。

「あなたがあの石田どの、羽柴組の——だっ！」

今度はピンクのチョークを食らって、幸村が口を噤んだ。ハチマキのおかげで直撃を避けられているとはいえ狭い額が真っ赤になる。凶悪なほど仏頂面になった三成がずいっと前に出た。

「だからこの間抜け中坊！ 二度とそれを口にするなッ」

「それ？ ああ、あなたが羽柴組に居候してることで——がっ！」

今度は青のチョーク。

涙目になった幸村の制服は白と赤と青に染まる。

「考えなしに口を開くなこの大馬鹿もの！ その口、永劫に開かせないようにしてやろうか！？」

「……すみません」

幸村の本能が「この人に逆らっちゃ駄目だ！」と叫んで、なんだかよくわからないままに真田幸村は謝っていた。そうしてそろりと顔を上げたところで、少し息を荒げた樋口兼続が目に入り、またも顔を輝かせる。

兼続どの！——と叫ぼうとしたところで、当の本人に口を塞がれて、黙った。

大きく開いた幸村の口を手の平でぎゅっで押さえつつ、兼続はちらっと三成を見て用心深そうに周囲の反応を伺い、ゆっくりと立ち去る弥太郎に小さく手を振って、囁く。

「……ぎりぎり間に合ったか？」

「ゲッツー(併殺)、というところだな。俺が来た時はランニングホームラン直前だったが、まあ、結果的にはアウトだ。小島が一塁で一人を刺したがな」

「……なんだ、その判りづらい喩えは」

「判りづらい方が良いかと思ってな。——兼続、幸村が死ぬ」

「おっと、すまない」

真っ青になった中学生は酸欠寸前で解放され、大きく咳き込んだ。兼続はほっとため息を漏らしながらその背中をさすってやる。そんな状況でも幸村は父親の贈り物をしっかりと腕に抱えて、それは箱の中でたぷんっと音を立てた。

はっと幸村が我に返る。

「あ、ああああの兼続どの、今日は謙信公の誕生日で、だから俺はここに来て、そのあのだから、あれ？ えーと……」

「わかってる、わかってるから幸村。……とにかくここはまずい、場所を変えよう」

「はい！」

行動が突発的で活動的で短慮なことをのぞけばいい子、なんだけどな。

目をきらきらと輝かせる幸村を見ながら兼続は内心で呟く。

——いや、それでは全部、悪いことになるのか。

参ったな。

三人は場所を小綺麗な喫茶店に移した。

人目に付かない四人がけの席を陣取ったふたりの高校生とひとりの中学生は、それぞれに「俺はカフェオレをもらうかな。甘くないやつ」「……わたしはホットコーヒーだな」「じゃあその、俺、水を一杯いただきたい！」と注文する。

最後の水を頼んだ一名は、横から頭をひっぱたかれた上、「面倒だしお子様だからオレンジジュース」と眼鏡を掛けた高校生から訂正が入ったが。

そしてそのオレンジジュースの氷が溶けきるまで、兼続は決して珍しくはない熱弁を揮って——素行の悪い若い衆をよく叱るからだが——幸村の行動が迷惑であることを語り、ため息混じりにこう締めくくった。

「いいか、幸村。極道と言おうが暴力団といおうが、やくざの価値は変わらない。お前は武田信玄を尊敬しているだろうし、無論のことわたしも謙信公を尊敬している。しかしそれは周りには認められないのだ。常に社会から後ろ指を指される存在であることを自覚しておくべきだぞ」

「……お前の武田は高坂が、上杉は直江がかなり稼いでいるからわからんだろうが、食い詰めた連中は何をするかわからんからな。お前が違うと言い張ってもその違いがわかる人間など居ないと思え」

カフェオレのカップをソーサーの上で回しつつ、三成が言い足した。素っ気ない面持ちでカップを押しつけて幸村を正面から見つめる。眼鏡を通してその眼差しは鋭かった。

「この世界にいるにはそれなりの覚悟が要る。それを、覚えておけ」

「……はい」

三白眼に真摯な光を称え、幸村は神妙な面持ちであごを引く。兼続はコーヒーとカフェオレのおかわりを頼み、ウェイターが居なくなったところで椅子の背もたれに身を預け、かすかに微笑んだ。

「今さら日常になってしまったものを非日常として捉えることは難しいかも知れないが、必要なことだ。もしもお前が望むならいくらでも話し相手になろう。三成、お前もどうだ？」

「俺には必要ない。間に合ってる」

「仲間はずれにされたとか言って拗ねるなよ？」

「誰が拗ねるか！」

「おや、兼続う～？」

不意に真上から聞き慣れた声が降ってきて、兼続は三成を宥めようとした言葉を思わず飲み込んだ。見上げてびっくりする。今朝、学校まで送ってくれた顔がそこにあって、同じように驚きに目を丸くしていた。

「慶次……？ どうして、ここに」

前田慶次はいつものように気軽な洗いざらしのジーパンにTシャツ姿で、髪を短く切った頭へ手をやっている。空を向いた黒髪を困惑げに撫でながら。

「この近くで引っ越し屋のバイトしてるんだよ。時間がまだあるから昼飯に寄ったんだ。ここのオムライスが好きで」

「オムライス？」

「絶品だぜ。しかしホントに奇遇だなあ、こんなところで会うなんて」

やってきたウェイトレスが兼続の前にコーヒー、三成の前にカフェオレと注文の品を置き、慶次に「いつものですね」と笑いながら話しかけて、裏手に戻っていった。近く、いいか？ と確

認を取った慶次は近くの椅子を引き寄せて座る。

「まだ学校の時間だろ？ どうしたんだ？」

「……慶次、この中学生が真田幸村。お前に話したことがあるな。武田組の若虎と連絡を取り合ってるって」

「へえ、この坊主がね。このハチマキは何だ？」

「一年前、御屋形様にもらったんです！ お前には赤が似合うって！」

「はっはっは、元気が良いな。さすが甲斐の若虎と言われるだけはある」

「ありがとうございます！」

「……普通にしゃべれないのか？」

「はい！ もちろん喋れます——てェっ！」

すっと指を伸ばした兼続に思いっきり鼻を弾かれて、幸村は顔をくしゃくしゃにして鼻の辺りを押さえた。またも涙目になりながら上杉家の居候を見つめる。

「かにえつくどのお~~~~~っ」

「どうしてお前はいつも叶えて欲しくない予想のど真ん中に行くんだ、幸村。中学二年生になったんだから少しは常識を身につけろ。……お前の兄はあんなに常識人なのに、どうしてお前は非常識なんだろうな」

「違います！ 俺はちゃんと常識的で——」

「常識人は普通の音量で喋る、他に誰もいないから良いが普通なら迷惑だ」

今度は鼻を押さえる手を指先で弾こうとしたが、慶次に止められて仕方が無く、兼続は口を押さえるだけにした。仕方がなく黙った幸村は不満たっぷりに口を閉じ、ついでむうっと唇を尖らせたが、今度はそれを見た三成が容赦なく額をひっぱたいた。

「痛い！」

「なんかむかつくぞ、こいつ」

「……むかつく程度で殴ってやるな、三成」

「俺はこういうタイプが一番嫌いなんだ。人の話を聞いているようで聞かない奴が」

「頑固なのは良いことだぜ。まあ、程度にもよるけどな」

机に頬杖を突きつつ、慶次が笑いながら話に割り込んだ。さあ早く飲んで、開けっぴろげな笑顔と大きな手で三人にそれぞれの飲み物を示す。兼続には「そのコーヒーはマスターのご自慢だぜ」と一言付け加えた。

しっかりとコーヒーを味わい、カップの縁から唇を離れた兼続がゆっくりと満足そうにうなずく。

「ああ、確かに濃くてまろやかだがほとんど癖がない。とても飲みやすいな」

「あんたならきっと味がわかると思ったよ、兼続。それでなんでここへ？ そっちの羽柴組もそうだが、あんたもちょっとマズイだろ。——近くには、織田連合の事務所もあるしな」

軽く首をかしげた兼続は、コーヒーカップを置き、ざっと武田信玄の電話の内容を話した。最後には幸村を手のひらで示し。

「武田信玄から直接電話をもらった以上、道ばたに放り出すわけにもいかず、ここまで連れてきたんだ。その駅から一駅で武田の事務所に着く」

「ああ、なるほど、わざわざこいつを送り届けに来たのか。そういえばここは武田も近いんだっただな。——なあ幸村、お前、兼続のこと好きなのか？」

「はい、もちろんです！ 兼続どのには昔、大変よくしていただきました！ ご恩をお返しできたらと思って——」

「だーから普通に喋らんか、お前は！」

「……痛いです、三成どの」

大仰に痛がる幸村だが、どうせお前は石頭だろう、と三成の反応はあくまでも冷たい。額にチョークを三発食らって叩かれて、鼻を弾かれた幸村の顔はまだらに赤くなっている。慶次は笑いながらそんな中学生の頭をぐしゃりと撫でた——ほとんど子供扱いで。

「それで幸村、その赤いハチマキ、ここんところ、この辺りの愚連隊にちょっかい出してんのはお前か？」

「いいえ！ ちょっかいを出してきたのはあっちです！」真田幸村は勢いよく立ち上がる。「いきなり上田中学にいる真田十勇士を叩きのめし始めたので——！あ、あああの、その.....」

しかめっ面の三成が指先でチョークを弾いているのを見て、ひるんだ幸村は声のトーンを落とし、だがぐっと拳を固めた。

「真田家には祖父の時代から十人の勇士が居て、今でもその子供が真田に仕えてくれています。その彼らを奴らが片っ端から叩きのめすんで、俺はそれを止めているんです」

首をひねって、兼続が白いこめかみに触れる。

「.....真田十勇士の話は何度か聞いたことがある。もともとはお前の祖父、幸隆(ゆきたか)どのは明治の侠客で、その時の配下だったな。——どういうことだ？」

固めた拳を見つめたあと、幸村は三白眼を細め、悄然と肩を落とした。とすん、と小柄な身体に相応しい音を立てて椅子に座り直す。

「たぶん、うちの組が小さいのが悪いんでしょう。どうも悪い遊びの標的にされているようなんです。十人全員を倒したらそこで終わり、という風に.....。そうそう簡単にやられる連中ではないので、今のところやられたのはふたりですが、いつ終わるか判らないんで、みんな参ってます」

慶次が顔を曇らせた。

「.....ひでえな」

漏らした途端、いきなり後ろからオムライスの皿を差し出されて、慶次は少し驚いて身を引いたが、ウェイトレスに礼を言って——指先で皿を、押しのける。代わりに兼続が渋い顔で身を乗り出した。

「武田組には言ってないのか？」

「いいえ、兼続どの。こんなことで御屋形様をわずらわすことは出来ません。うちは小さい所帯ですが、武田組の下にいることをひけらかしたことは一度だってありませんから。.....自分たちでケリを付けたいんです」

「中学生がそんな無理をするな。怪我でもしたらどうする」

「ですが.....！」

叫んで立ち上がりかけた幸村は、三成の伸ばした手で襟元を掴まれ、強引に座らされる。生徒会の書記はいつもの無愛想な顔つきだった。

「相手は誰だ？」

はっきりとはわからないのですけど.....、と幸村は情けない顔で前置きして、ぽつんと落とした。

「.....たぶん、徳川会の若手.....、徳川秀忠(とくがわひでただ)の愚連隊じゃないかって」

ぴくっと引きつるように、兼続の眉が動いた。三成は「そうか、あそこは子供が暴れているらしいからな」と呟くだけだったが、机に身を寄せていた慶次がふと憂い顔になり、そろそろと視線を動かして傍らの兼続を伺う。

「なるほど、徳川会の三男といえば話もわかる.....」

上杉の居候はため息にしては少し大きく息を吸って、吐いて、また渋い顔になった。

「このところ、徳川会の上部団体、織田(おだ)連合が力を付けているからな、たぶん増長しているんだろう。珍しいことじゃないが、見過ごせることでもない。——なんとかならないかな？」

「力で潰すは容易いが、それはいやなんだろう？」

「相手は高校生なんだぞ？ 三成。確かに簡単かも知れないが、あとあとのことを考えるとなあ。それに全て力で解決しようとするのは好きじゃない。なにか伝手はないか？」

五秒ほど考え込んで、三成はきっぱりと首を横に振った。

「悪いが俺もそこまで大物じゃない」

「慶次は？」

「……俺も織田方に知り合いはいねえな。何人か心当たりはあるにはあるが、出て行ったら刺されちまうよ。いい知り合い方はしなかったからな」

「そうか……」

兼続は呟いて、長い思案に暮れてしまった。真顔でブラックのまま飲んでいるコーヒーの水面を見つめて少しも動かない。

それを見た石田三成が問うように慶次へ目をやるが、上杉家の居候、その二は申し訳なさそうに眉を下げて笑い、首を振った。

「——……」

一瞬、何かを言いかけて口を開いた幸村が、心と口を噤む。

それからしばらく考え込む兼続を見つめた末、幸村はおもむろに背筋を伸ばし、生真面目な声で「兼続どの」としゃちほこ張って呼んだ。

「何事にも弱肉強食はこの世の定めです。戦う準備は出来ています。ご心配いただき、誠にありがとうございました」

深々と頭を下げる。

兼続は戸惑ったように表情を揺らして、眉を寄せた。

「……水臭いぞ、幸村」

「いいえ！ 今こそ我らの名を上げる時！ 遊びで我らを敵に回したことを後悔させてやりましょう。真田組の意地をこの時こそ見せてやるのです。——そう、心配しないでください」

口元に強張った笑みを浮かべて語る幸村に、軽く目を見開いた兼続は明らかに感動し、言葉を失っているようだった。

かすかに目元が潤んでいる。

横で見ていた慶次は一瞬、兼続が泣くんじゃないかときょっとしたが、高校二年生は寸前で堪え、そうか、と震える声で囁いた。

「お前がそこまで言うならば……。ただ、今思いついたのだが、頼りになる人の心当たりが一人だけ、ある。その人の所へ話を持って行くことは許してくれ」

三成が首をかしげた。

「誰だのことだ？」

兼続はちょっと微笑んだ。

「本多正信(ほんだまさのぶ)」

「本多正信か……」

幸村の話にある程度の決着が付くと、喫茶店の伝票をひょいっと指先でつまんだのは慶次で、「ま、ここは俺に任せてくれ」と冷め切ったオムライスに見向きもせず支払いに向かった。その際、太い腕でひょいっと小柄な中学生を引っ張っていった——「ジュースでもテイクアウトしてやろうか？」

その大男に吊られ立ち上がった兼続の横で、三成がぼそっと呟く。

「確か徳川会の会長、徳川家康(とくがわいえやす)が親友とも頼む男だったな。組もなく舎弟も居ない、身内には嫌われているが、家康だけは重宝していると聞く。知り合いなのか？」

「実は何度も会ったことがあるんだ」

思わぬ返答に、三成はすっかり渋い顔になった。

「どこでだ？」

「鷹、だよ」

兼続は口端を上げて笑った。

「景勝さまは動物が大好きだろう？ だから時々、近所の鷹匠の所へ遊びに行くんだが、本多正信はもともとそこの家の出なんだ。自分の鷹をそこに置いているからよく会いに来るんだよ。そんなこととは知らないから会ったら普通に話していたんだが、ある時、あちらが気づいてね。…上杉どどのの養子か？ と聞かれた」

「鷹匠……。また、古風だな」

「慣れるとなかなか可愛いぞ？ 付きっきりで付き合っただらねばならないから今は無理だが、いずれ一羽、欲しいな」

待った、と三成は手を挙げて兼続の注意を引く。

「もうちょっとついていける趣味にしてくれ。俳句といい鷹匠といい、お前の趣味は俺の手に負えん。爺むさい」

む、と兼続の眉根が寄る。

「何を言う、お前の趣味の無さの方が問題だと思うぞ。勉強以外に少しは趣味といえるものを持ったらどうだ」

「——おいおい、ふたりとも、それが高校生の会話か？」

呆れた慶次の声が飛んできて背中をぼんっと叩き、ふたりはしばし顔を見合わせ、同時に「わかっているんだけどな」的な苦笑を浮かべた。——結局のところ、似たもの同士なのは違いないのだ。

すでに幸村は、好物だという蜜柑ジュース——オレンジジュースとはまた違うらしい——をテイクアウトできて、満面に笑みを浮かべながら、一足先に外へ出ていた。その腕に抱えられた大きな桐の箱はかなり人目を引く。

兼続と三成、慶次は中学生を追って外に出た。

ちりん、と鈴が鳴る。

真上からの陽光に、兼続は優に頭一つ以上でかい慶次を眩しげに、目を細めながら見上げた。体格の良い慶次の顔は整っていると言うより、野趣溢れていて、偽らない人柄をよく現している。

「慶次、ごちそうさまだった。バイトはいいのか？」

「まだちょっと時間があるから付き合うぜ。幸村を送るんだろう？」

「駅の近くまで行こうと思うが。三成、いいか？」

「ここまで来たら乗りかかった船だろう。俺は別にかまわんぞ」

「すまないな。学校をサボタージュしているのに」

気にすることじゃない、と三成は軽く肩をすくめて見せた。慶次は傍らでその会話を聞きながら鋭い視線を周囲に向けている。巨漢の青年が険しい顔で周囲を睥睨する様子はずいぶんと迫力があつた。

その様子に気づかず、兼続はほっとため息を吐き、三成に囁いた。

「そんなに悪い子じゃないだろう？」

「……まあ、少なくとも徳川会の馬鹿息子よりは増しだろう。あの有り余る元気を消化できる術を考えてやる必要があるだろうが、根は悪くなさそうだ」

「——兼続どの！」

いきなり素っ頓狂な声を上げて、前を歩いていた幸村が蜜柑ジュースのパックをしっかりと抱えながら飛んできた。三成はしかめっ面に気まずさを混ぜながら顔を背ける。兼続は三歳年下の少年に優しく微笑んだ。

「どうした？」

「すっかり忘れておりました！ ——謙信公に、これを」

「ああ、贈り物の酒か。かなり高級そうだな……」

「父が『魔王』という芋焼酎だと言っておりました！」

「魔王！？」

目を輝かせて叫んだのは慶次と、意外なことに受け取った兼続だった。上杉家の居候たちは受け取った桐の箱をじっと見つめ、ふと顔を見合わせ、少々頬を赤くしながらごくりと唾を飲み込む。

抱える兼続が「まさか……」と呻くように呟いた。

手が微かに震えている。

「まさか、魔王をこの目で見る日が来るなんて……」

「——なんなんだ？」

訝る三成の前で、今度はでかい手を伸ばして、慶次がそっと桐の箱を撫でた。

男臭い顔でにやにやと笑う。

「お前、知らないのか？ 幻の芋焼酎だぜ。インターネットで二十万以上で取引されたこともある。いわゆる3Mの一つで、3Mは森伊蔵、村尾、魔王のことだ。言ってみりゃプレミアムの焼酎ってことだな」兼続の耳に唇を寄せて囁く。「……おい兼続、こりゃ長期熟成してあるやつだぜ」

「ああ、最近手に入れたものではないな。今では販売が追いつかなくて長期熟成は作っていないと聞くが……」

「こいつはぜひ、一献、お付き合いしたいね」

「機嫌が良ければ呼んでくれるかも知れないな。わたしもご相伴にあずかりたいものだ。——幸村、これは確かに預かった。謙信公は必ず喜ばれる。わざわざすまなかつたな」

「いいえ！ そのお言葉だけで十分です」

子供っぽい顔でにっこりと微笑んで、幸村はうれしさに頬を紅潮させた。兼続は緩くうなずいて小柄な少年の肩をぽんっと叩く。横で桐の箱を眺めていた三成が何気なく同級生の肩に手を置き、引き寄せた。

「そんなにうまい酒なのか？」

「芋焼酎の認識を変えてくれるような酒だぞ。複雑な味わいがある」

「——お前、未成年だろうが」

本来ならば真田幸昌の手柄であるはずなのに、得意満面だった兼続は三成の一言にびくっと身を震わせて、凍り付いた。おや、と眉を上げた慶次が「そういえばそうだったな」としごくのんびりと呟く。

「飲む姿が堂に入ってたんでわからなかったな」

「いや別に、忘れていたわけではないんだが……」

ややあって、肩を落とした兼続が桐の箱を抱え直しつつ、三成の顔を伺った。常日頃、張りのある表情は一転して、ちょっとばかり気弱そう。

「まあその、何というか、成り行きと言うか、わたしは幸村の年になる頃にはもう飲んでいたからな。謙信公は酒が好きなんだ。有名だからお前も知っているだろうが。必然的に同席するとグラスを渡されて飲むことになって、それを今まで疑ったことがなかったかも知れないんだが……」

長々とした言い訳に聞き入る三成はいつもの渋い顔だったが、不意に口端が引きつって、いきなり「駄目だ！」と声を上げながら吹き出した。人を寄せ付けない冷ややかさなど吹っ飛ばして笑い転げる。

啞然と口を開けた兼続の顔がすぐ真っ赤になった。

「お前、またわたしをからかったな!？」

「未成年のくせに飲酒をするからだ」

どうせお前も飲んでるんだろう、とさしたる根拠もなく兼続が言え、三成は未だ笑いを殺しきれないまま、堂々と口にするほど馬鹿じゃないがな、と応じ、ますますいきり立った兼続が「なら一緒じゃないか!」と叫んでふたりはぎゃんぎゃんと言い合いを始める。

まったく、と肩をすくめた慶次。

ずずっと蜜柑ジュースを飲みきって、幸村は赤いハチマキの先を引っ張った。不思議そうな顔で金沢の巨漢を見上げる。

「あの～、慶次どの」

「どうした？」

「お二人は仲が悪いのですか？」

はっはっは、と慶次は大口を開けて笑う。

「さあ、どうなもんなのかな。こっちは上杉家の居候、あっちは羽柴組の居候。仲が良すぎても悪すぎても問題だろうが」

「良すぎても問題、とは？」

まったくこの世界のことを知らないわけではないだろうが、どうも詳しくなさそうな少年を見下ろして、慶次はつり上がった眦を少し下げた。大きな手でぽんぽんと背中を叩く。

「友の背中には刺せないってことさ」

近道はこちらなので、と案内する幸村の後ろに従って、奇妙な四人はぞろぞろ裏道をと通って目指す駅に近付いた。あと角を一つ曲がれば駅が見えるというところまで来て、幸村は三人を振り返り、深々と頭を下げる。

「どうもお騒がせいたしました！」

懲りていない少年の大声が細い道一杯に広がる。あからさまにしかめっ面になった三成の腕を押さえて、兼続は一步、前に出た。にこやかに微笑みながら右手を差し伸べて握手を求める。

「また会おう。いつでも上杉家に会いに来てくれ」

「はい！」

「また会おうな、甲斐の若虎」

慶次がにやりと笑う横で、三成は口を開き掛けて閉じ、素っ気なく手を振るのみにとどめた。それを見た慶次が肘でつつくが生徒会の書記は嫌がって顔を背けてしまう。幸村は三人に向かってにっこりと微笑んだ。

「ではまた、みなさまにお会いできる日を心から、楽し、み、に——」

景気の良い語り出しは徐々にとぎれていき、幸村の顔が強張ったのを契機に、ぷつんと飛び離れた。兼続たちはわけがわからずに中学生を見つめる。見る間に表情を険しくさせて、少年は猛然と頭をもたげ、白い歯を剥いた。

「徳川秀忠(とくがわひでただ).....」

「ああ、間違いない」

ねっとりとした嫌な響きを伴って、声が響く。

振り返った兼続たちはそこに体格も様々な少年を見つけた。

計、九名。

着込んだ制服はばらばらだが雰囲気は共通している。

ひどく、悪そうだ。

「すごい偶然じゃない」

真ん中あたりに立つ三角形の顔立ちが特徴的な中学生がふふっと楽しげに笑う。決して華奢ではないが、周りの少年と比べて体躯が一回りほど小さく、濃い緑色のブレザーに濃紺のネクタイを締めていた。堂々と「三方原高校」の校章を胸に付けている。

「いきなり見つけちゃったな。こいつ、真田のトコの幸村でしょ」

「赤いハチマキ、間違いねえな」

「こいつが邪魔してるんでしょ？ ちょうどいいじゃない」

にやけた少年たちが吐き出す一言一言に幸村の顔が険しくなっていく。一步、踏み出した中学生の前にさりげなく立ち塞がったのは、兼続。

「.....兼続どの？」

幸村は高校生を押し除けることも出来ず、戸惑う。すらりと張った兼続の背中では緊張で強張っていた。しかし幸村を押しとどめた仕草はさりげなく、発した声はとても楽しげで、

「お前たちが徳川のものか」

と、弾むような調子で目前の少年らへ問いかけた。その声を聞くなり幸村の背筋をぞわりと何かが駆け抜ける。思わぬことに固まる中学生の斜め前、あ〜あ、と吐息した慶次が空を仰ぐなり、「間が悪いな」とぼそっと漏らした。

金沢からやってきた男は腰に手を当てて半身を開き、ぶっきらぼうに続けた。

「あー、そこの少年ら、悪いことは言わないから、さっさとどっか行きな」

体格は良いが、暴力の臭いは薄そうな青年の言葉に、少年たちはひるむどころか人数を頼った余裕をのぞかせてへらへらと笑いながら小声で囁きを交わし合う。

まだ笑い声が響く最中、かすかに足幅を広げて仁王立ちになり、兼続が相も変わらず幸村に背を向けたまま楽しげに続けた。

「いいじゃないか、慶次。……彼らがやりたいと言うんだ」

「——兼続」

「止めるな。あんな話を聞いて黙ってはいられない」

さらに一步、前に出た兼続は三成に酒瓶の箱を渡すと、向かって手のひらで地面を押さえるそぶりを見せて「頼む」と付け加える。三成は「わかったよ」とつぶやいて後じさり、幸村の腕を押さえた。

「ここは兼続にやらせる。お前は手を出すな」

「……し、しかし」

「安心しろ。あいつは無駄に強いからな」

「強いことは知ってますが、しかし、その」

幸村が戸惑う間に兼続がゆるゆると踏み出、「人を痛めつけるのが面白いのか」と声を弾ませたまま、再び問いかける。上背があるとはいえ、どちらかといえば細身の兼続に少年たちは忍び笑いを漏らした。

「オレたち幸村だけでいいんだけど」

「幸村のおまけになっかな」

「お兄さん、後悔するよー？」

手足をぶらつかせながらにやけた顔の三人が前に出た。中学生だろうに兼続よりも体格がいい。その三人を相手にしながらもふと振り返った兼続の顔にはなぜか満面の笑みが浮いており、彼は笑んだままひらりと手を振って見せ、少年たちの間合いにぐっと踏み込んだ。

バン、と激しく肉のぶつかる音が響き渡り、幸村がびくっと身を震わせた。

「……ああああ、あの、どうのことですか？　なんで、兼続どのはいきなり彼らとやる気になったんですか？」

兼続の鮮やかな後ろ回し蹴りで少年一人が吹っ飛ぶ。続いて懐に飛び込んできた二人を後ろに飛んでかわす。一瞬、眉を寄せた慶次は自然体で立ちながらも、いつでも飛び出せるようにかかとを浮かせていた。

「甲斐の若虎、あんたも中学生なら聞いたことあるだろ？　狂犬の与六って奴の噂。四年ほど前、ずいぶんと噂になった中学生だが……」

毎週の日曜、道場で汗を流す兼続の動きは慣れていて、間合いに踏み込み、引く仕草にも無駄がなかった。殴りかかってきた少年の拳を手のひらで裁き、腕を取って捻り、折れる寸前で柔道の要領で投げ飛ばした。

「あれ、兼続のことなんだよ」慶次の顔はすっかり洪くなっている。「与六ってのは奴の渾名みたいなもんで」

「そうなんですか！？　で、すが、名前が——」

「幼名だ」

いつの間にかチョークを手の上で遊ばせながら、三成が冷静な眼差しで兼続を見やる。

「上杉家では十五歳になるまでは別の名前と呼ぶのが慣わしなんだそう。あいつが引き取られたのが小学校六年の時だから、三年間ほどは与六と呼ばれていたらしいぞ」

「幼名……」

かつての与六——兼続の足下にはすでに四人の少年が意識を失い、転がっている。だが兼続の動きには疲れなど見えず、一方的にやられ、気圧される中学生たちの前に端然と立っていた。

幸村はその背中を見て言葉を失い、慌てた顔で慶次を見上げる。

「で、でですが、狂犬の与六といえば、鉄板で六人を殴り殺したとか……コンクリート詰めにしたとか……なんか、酷いことをたくさん聞きましたが」

「そりゃ単なる噂だ。当時の少年事件の尾ひれが付いただけさ。どっちかっていうと、`徳川殺しの犬、って渾名の方が本当らしい。徳川会に関わる人間に片っ端からくっついてかかってたらしいからな」

「徳川殺し……？」

それは聞いたことがなかったのか、オウム返しにした三成は少し注意を逸らしたが、直ぐに目を戻す。傍目からもわかるほどの鋭い緊張をまといながら兼続はひっそりと嬉しげな笑みを浮かべていた。

少年の一人がナイフを取り出し、銀色の輝きで宙を薙ぐ。

慶次が神経質な仕草で前髪をそっと撫でた。

「景虎に聞いたところに寄れば、なんでも兼続には`与七、って名前の弟が居て、二人そろえば向かうところ敵なし、だったらしい。もともと、弟の方は刀傷沙汰を起こして、高野山で無理矢理出家させられたってことらしいが。必ず木曜日の夜、兼続に電話掛けてくるぜ」

「……ほお、弟が居るのか、あいつ」

危うげな光を放つ刃物は兼続の踏み込みと同時に消えて、遠くの方でちゃりんと音が鳴った。蹴飛ばした動きさえ、中学生たちに見えただろうか。顔を引きつらせた少年が一人、じりじりと後じさったかと思うと、ぱっと背中を見せて逃げる。

兼続は追わず、残りの四人に満面の笑みを向けた。

さりげなく幸村に背を向ける。

「さあ、ここから先は手加減なしだ。これ以上、刃向かえば痛い目を見るぞ」

幸村だけでなく、三成も慶次も心の中で『手加減なんかしてないくせに！』と叫んだが、どうやら兼続は本気のようなだった。わずかに腰を落とした仕草さえ、剣呑さを帯びている。徳川秀忠とおぼしき、三角形の顔の少年が悔しげに唇を噛み、握りしめた拳をぶるぶると震わせた。

「あんた、何者だ……？」

「春日山高校二年、樋口兼続。お前が徳川秀忠か？」

一瞬、あごを上げた秀忠の目が憎しみを帯びる。

「あんた！ 上杉家の——！？」

「間違えるな。謙信公にはお世話になっているだけだ。上杉組は関係ない。……単にわたしが貴様らを叩きのめしたかっただけだからな」

「……狂犬の、与六」

怯えを宿した秀忠の目は兼続と幸村の間を行き来して、かみ切りそうなほど強く唇を噛みしめて、ぷいっと顔を背けた。そのまま何も言わずに首を巡らし立ち去っていく。残された三人の少年はあからさまに戸惑ったが、「覚えてろ」と一人が吐き捨てて去っていった以外は静かなもので、すごすごと背を向けて消えていった。

ようやく慶次が安堵の息を吐き、強張らせていた肩から力を抜く。

肩の辺りをほぐしながらゆっくりと高校生に歩み寄った。

「大丈夫か？」

「ああ、……怪我はしていない。する間もなかったからな」

会話するふたりの足下には四人の少年が気を失って倒れている。兼続はその最中に立ちながら、かすかに赤くなった手をゆるゆると握り開くだけで、身じろぎもしなかった。傍らに寄った慶次が肩にそっと手を乗せる。

「兼続……？」

真っ直ぐにどこかを見ていた首が、微かに折れる。兼続は傍らの慶次に身を寄せて口元を押さえたようだった。三成と幸村から見て、慶次の巨体の影に兼続がすっぽりと隠れる。ぼそぼそと覇気のない声が呟いた。

「……すまない、気分が……」

「吐きそうか？」

慶次はさらにいくつか、幸村と三成に聞こえない声で問いかけたあと、「今は何も考えるな」と話しかけながら背中をさすってやるような仕草をする。兼続は身を縮めるようにして慶次に縋りながら身を震わせていた。三成は近付こうとしてたたらを踏み、立ち止まる。

「おい、すまん」

慶次が振り返った。困り切った顔で手早く指示を与える。

「幸村を武田の事務所まで送ってやってくれ。あんたも気をつけてな。一応、武田の事務所なんだから」

午後九時。

上杉組、本家の門をくぐった前田慶次は、いきなりドスのきいた声で「お世話様ですー！」とがなるように挨拶をされて、思わず足を止めた。玄関脇を見るとしゃちほこばった格好で本家住み込みの若い衆が三人、並んでいる。

深々と頭を下げた彼らは、慶次の薄汚れたスニーカーを見て誰だか察したらしく、照れ笑いを浮かべたながら顔を上げた。

「慶次さん、お帰りなさいやし」

「すみません、思いっきり間違えました」

「挨拶はするなって言われてるのに」

親しげな表情を浮かべた三人はいずれもこざっぱりとした背広を着ている。たぶん兼続から「人前に出ても恥ずかしくない格好で」とでも指示が出たのだろう。実はまだ、二十歳にもなっていない彼らを見やり、慶次は微苦笑を浮かべた。

「いいよ、気にするな。今日はずっと大声を張り上げてたんだな、声が嘎れてるぞ」

「始まったのが三時間前ですが、まだぼろぼろ人が来るんですよ」

「今日はどうなさったんですか？」

「ずいぶんと遅かったですね」

「ちょっとな、バイトで遅くなったんだ。まだずいぶん人がいるのか？」

「ほとんど帰られてないです」

「そうか。去年は朝方まで続いたっけな。三人とも、あんまり無理すんなよ」

「はい！」

手を振って彼らに答えて、慶次は人が集まっている中庭を避けて屋敷の奥に進み、まず風呂で汗を流した。それから前もって兼続とともに選んだ服に着替える。

ハンガーから外した背広はよく締まった色の黒で、慶次にはよくわからないのだが「ビートルズが着ていた形の背広だ。襟はあるが」ということらしかった。シャツは光沢のある灰色と黒で、襟と胸の部分の色が違う。ネクタイは濃い赤——エンジと言うべきだろうか。店員に教えられた通り、それぞれの部分を整えて、鏡をのぞき込んだ。

——兼続という少年は、嫌味なくらい隙がない。

店でも驚いたが改めて見ても、まるで自分が自分ではないようだった。

どうしても堅苦しさをを感じるがこればかりは仕方がない。

「ま、何度も着るものじゃないしな」

ひょういっと肩をすくめ、大柄な身体を翻して中庭に向かった。

「どこへ雲隠れしていた」

立木がまばらに散る最中、さりげなく明かりの付けられた会場にはありとあらゆる業界の人々が集まっていた。それほどに上杉謙信の名は広く知られており、また慕われ、好かれている。もちろん同業者も多く、ちらほらと派手なスーツが見え隠れしていた。

ざわめきが満ちる中庭にさりげなく踏み出して、歩き回るウェ이터の盆からウーロン茶を取った慶次は、グラスを口に当てたところで後ろから低いがなめらかな声に呼びかけられ、ぎょっと振り返った。

上背はほぼ、一緒。

「姿が見えぬので気にしていた」

主役の男がかすかに微笑み、立っていた。

——上杉組、組長、上杉謙信。

もともと、新潟では名の知られた寺の息子だったこともあり、今でも僧体で——もちろん僧侶の資格も持っており、三年前に出家もしている——通している。普段であれば、和服姿で剃髪した頭部を白い布で覆っているが、今は背広ということもあって何も付けてはいなかった。

端正で人目を引く容貌には禁欲的な厳しさが漂う。だがその一方で、墨で描いたような眉の下、強い輝きを持つ切れ長の目はかすかな笑みを浮かべていた。自らに厳しく、他者に厳しくありながらも、情けを知る謙信の人柄がそこになじみ出ている。

慶次は困って頭を搔き、軽く頭を下げた。

「悪かったですね。ちょっとバイトが長引いてしまって」

「らしいな。兼続がそのようなことを言っていた。来たばかりか」

「ええ。まだ一杯目です」

ちょっとグラスを掲げて、「おめでとうございます」と付け加える。

謙信はわずかに笑ったようだった。口端を少しだけ上げる。

「ありがたいとは言うておが、悲しくはないが嬉しくもないというのがわしの本音よ。所詮は政治的なパフォーマンスに過ぎぬ」

「確かに。本気で祝ってくれているのはわずかでしょう。とはいえ、昨日、すでに『川中島』で祝ったって聞きましたが？」

にやにやと慶次が笑えば、謙信は鮮やかな笑みで応えてきた。

「村上に前祝いと称されて呼び出されれば、わしとて行くしかなかろう。ちゃっかり武田信玄も顔を出していたがな」

居酒屋、川中島——。

上杉、武田両家で知らぬ者はいない。

両者の本家の屋敷からちょうど真ん中当たりにある、日本庭園の美しい定員十五名ほどの小さな飲み屋だが、その店主、村上義清は極道の中では知らぬ者のない「戦後の巨人」だった。

しかし十年前、当人も驚くことに五体満足に引退してからは幻の酒を出す居酒屋の主人に収まっている。そして彼は、どういうわけだか、互いを好敵手と見ている上杉謙信と武田信玄のふたりを同時に呼び出しては、店で飲ませるのが大好きだった。

村上義清からの招待が来ると、双方の屋敷は「川中島合戦」に一体誰を出すのか、思案に暮れるという。

なにしろ謙信も信玄も、そして村上義清さえ並ぶ者のない酒豪なのだ。付き合わされる方の身にもなってくれ、と景虎が嘆いていたのを、慶次は何度か耳にしている。

景勝も何度か顔を出しているようだが、謙信公をして「あれは水を飲んでいいのか、酒を飲んでいいのか」と苦笑させるザル以上のワクのため——しかも表情を変えることもない——呼ばれる回数は少ないらしい。

微笑んでいた謙信がふと視線を外し、手にしていたグラスをひょいっと掲げた。

「今宵は楽しめ」

「そうさせてもらいますよ」

気軽に手を挙げて応えると、横にいた不惑ほどの男が少し驚いて慶次をまじまじと見たが、いきなりにやっと笑いかけられてすごとと消えていった。すでに踵を返した謙信はするりと人の最中へ入り込んでいく。

慶次はウーロン茶を勢いよく煽って中庭を見渡した。

ざっと百名ほど。

明かりが抑え目なので勘定はし辛い、恐らくそれくらいはいるだろう。

見直し続けた慶次は、真ん中あたり、人の輪が十重に取り巻いているすぐ横に、昼間に見た顔を見つけた——何度か見直してようやく、わかったのだが。しばし灰色の空を睨み上げ、上杉家の居候はそちらにゆるゆると近づく。

「おい、あんた」

「……なんだ、前田慶次か」

なぜか嫌そうに呟きながら、もはや見慣れた顔が仏頂面になった。

羽柴組の居候、石田三成は昼間とは打って変わって眼鏡を外し、前髪を撫でつけ、深みのある青い背広に花びらの一枚一枚を別の色——虹の七色だろうか？——に染めた飾りを合わせていた。少しばかり堅苦しそうに濃紺と白の縞模様のネクタイを締めている。

身に備わった冷やかな雰囲気は変わらないが、昼間の生徒姿と大きく違い、人目を惹く華やかさがあつた。片手にグラスを持つ姿もとても自然で、見た目の年齢もぐっと上がって二十歳くらいに見える。

三成は慶次の格好を上から下まで見、ふんっと鼻を鳴らした。

「ずいぶんと着飾ってるな」

「あんたも見違えたよ。びっくりした。眼鏡、止めたらどうだ？ ない方がいいぜ」

「……余計なお世話だ」

「はっはっは。まあ、そりゃそうだ」あつさり三成の嫌味を笑い飛ばし、「ところで甲斐の若虎、どうなった？」

眉根をぐっと寄せて、三成は吐き捨てるように言った。

「無事に武田の事務所まで送り届けたぞ。そうしたら車で送ると言われてな、断ったんだが無理矢理乗せられて、でかいリンカーンで学校の脇まで送られた。あんなことは二度とごめんだ」

「あ～～、そりゃ、すまなかったね。さすがに兼続を放り出せなくてな」

苦笑を浮かべて慶次が言え、途端に三成は表情を改め、心配を滲ませた目で慶次を見上げた。ちらりと傍らに目をやる。

「先ほどまでここに居たんだが、景勝さまを探すと言って奥に行ったきりだ。かなり落ち込んでいたようだが、……あの時、どうしたんだ？」

慶次は近くのウェ이터を手振り呼び、空のグラスを下げてもらって白ワインを手にとった。それをするりと半分飲み、

「兼続はなんて言った？」

「……自分が悪かったとしか、言ってなかった。兼続とは入学当初からのつきあいだが、滅多に落ち込むことなどないからな。いや、落ち込んだところは始めて見たかも知れない。アイツはいつも変わらんから」

「まあ、そうだがね……」

慶次は真顔でしばらく黙って、俺もよくわかっちゃいないんだ、と苦笑いを作った。大きな手で撫でつけただけの髪をかき回す。

「実は聞いてないのさ。バイクでここまで送ったんだが、すぐにバイトに行かなきゃならなかったもんでな。ただまあ、吐きそうなのもあったんだが、とても辛そうだったね。俺もあんな兼続は始めて見たよ」

「——よく、わからんな」

ぽつんと言って、三成は小さくかぶりを振った。慶次はゆっくりとあごを引いてうなずき、冷やかなワインを一気に飲んだ。辛口のそれは喉をするりと撫でて胃に落ちていく。その辛辣さをしばし弄び、慶次は呼び止めたウェイターの盆にグラスを返した。

「ちょっと兼続を捜してくるよ。この辺りに居るか？」

「あ、ああ。親父殿が居る限りはな」

グラスで示された先に目をやると、両手を大きく振り回す男の姿が目に入った。背が小さく、大きな目と大きな口を忙しなく開閉し、顔を真っ赤にして周囲を取り囲む老若男女を惹き付けている。その傍らには、すらりと背の高い清楚な和服姿の女性が立っており、にこにこしながら夫の様子を見ていた。

「へえ、あの御仁が羽柴秀吉かあ。酒が入って絶好調らしいな」

「酒を飲まなくとも人が集まるといつもああだ。たぶん散会になるまで喋り続けるのだろうな」

三成の口ぶりは呆れた風だったが、表情には親しみがあつた。思わず笑って、慶次は手を軽く挙げ、騒ぎの庭を離れた。

（大きな声では言えないが）カチ込み——襲撃があつた場合に備えて、上杉家の庭や屋敷は複雑な作りになっている。慶次は勝手知つたもので、屋敷の抜け道とするすると通つて景勝の部屋のそばまで庭を歩いていった。

ここまで来ると話し声は聞こえない。

葉のざわめき、近隣の喧噪、少しばかり気の早い虫の声。

慶次は心地よいワインの熱を胃に感じながら渡り廊下の傍らで足を止めた。

あと少し行けば石の上がり口がある。

履き慣れない革靴の中で足先をもぞもぞとさせながら、洗面で一步、二歩と歩みを進めた慶次は、三步目で、鼓膜を低く叩く声を聞いて、思わず足を止めた。

「……—、——……、——」

声は遠く、何を言っているのかはわからない。

だが聞いたことのある響き。

慶次は何気なく、木の茂みを割ってそちらに近付いた。

「——お前のやったことは、間違えては、いない」

この近くには謙信の部屋から続く散歩用の小道があり、石で組まれた椅子がいくつか置かれている。そこに誰かいるらしい。どこかで聞いたことがあるのに、すぐには思い出せない声をもどかしく感じ、慶次は思案顔で動きを止めた。

確かに聞いたことがあるのに。

……これ、誰だっけ？

「しかし、……景勝さま。関わりのない人間に暴力を振るつたことは確かなのです」

返す形で朗朗と響く兼続の声が聞こえ、慶次は思わず「あ！」と声を上げそうになり、口を押さえた。——そう、これは景勝の声だ！ ほとんど聞いたことがないからすぐに思い出せなかったのか！

ようやくもどかしさが解れ、身体から力を抜いた慶次ははたと、自分の置かれた立場に気づいた。

景勝と兼続の声の調子からして深刻な話であることが知れる。

慶次は大きな体躯をそろそろと動かし、急いで立ち去ろうとしたが、先ほどは音もなく割れた茂みが身体にまとわりつき一歩が踏み出せない。

そうこうしている間に、景勝の、謙信に似てなめらかで、抑揚のない声があった。

「兼続……、与六。お前は与七ではない」

「……景勝さま」

すっかりしょげて足元を見ていた兼続はそろそろ顔を上げ、景勝を見た。

大広間での乾杯が終わったので紋付き袴から動きやすい服装に着替えている。なんの飾りもない、襟の詰まった灰色の背広を着た大学生はきちっと背筋を伸ばしたまま、冷たい石の椅子に腰掛けていた。

時として、無表情すぎ、何を考えているのかわからない、と評される顔にはうっすらと心配げな色が佩かれていた。

——お前は与七ではない。

兼続は大きくかぶりを振った。

一度、二度、三度と繰り返して、震える手をぎゅっと握りしめる。兼続は景勝の傍らで遠慮がちに腰を下ろしたまま、また顔をうつむかせた。

与七。

もちろん上杉家のしきたりに倣った幼名で、戸籍上の名は樋口(ひぐち)実頼(さねより)。

二歳年下の弟、もうずいぶん前に見ただけの顔を思い起こし、兼続は思わず口端を嚙んだ。

「ですが……、与七は私のせいで、あのようになってしまったのです。とても、……怖いんです。私もいつか、与七のようになるのではないかと、思うと……」

「あれは強さを履き違えた」

兼続の言葉を遮った景勝の声はきっぱりとしていて、淀みがなかった。そう願うものの、そうだとうなずけない兼続は返事も出来ないまま、まだわずかに赤みを帯びている右手を見る。

震えがずっと止まらない。

左手で包み込み、痛みを覚えるほど強く握り込んだ。

「あの頃、わたしも強さを履き違えていたんです。……許せないと思う心のまま、関係のない人にまで手を出してしまった。そんなわたしを見ていたからこそ、与七はあのようなことをしてしまったのでしょうか。——わたしが悪いのです」

傍らに座る高校生を見下ろす景勝の眼差しは揺れることもなく、だからこそ強い。彼は二三度、口を開き掛けて固く閉じ合わせたあと、わずかに声音を変えて宥めるように答えた。

「曲がるのは、己の弱さ故だ」

「……………」

「与六」

いまや兼続にとって懐かしい名前で景勝が呼ぶ。ためらって、震える右手を固く握り込んだまま、兼続はゆるゆると顔を上げた。

小学生のころから、兄とも慕っている景勝はかすかに眉根を寄せて、いつものように唇を真一文字に結んでいた。

「責めるな」

どちらを、とは景勝はいわない。

弟の与七を思う兄としての兼続を、そして今日、感情が走るままに年下へ拳を向けてしまった兼続の双方に向けて、そう言った。

痛いほど景勝の気遣いがわかって思わず兼続は自身の右手に爪を立てる。

走る痛みに急ぎ立てられて、そっとあごを引いた。

「……——はい」

「ナイフか」

それまできちんと膝の上に置かれていた景勝の手がふと動いて、兼続の右胸、鎖骨から手のひら一つ分ほど下に触れた。一瞬、たじろいだように身を引いた兼続だったが、かすかに肩を丸めながら自身に触れる手を見る。

「まだ、駄目なんです。ナイフを見ると途端に身体が震えて……。今日は気分が悪くなる前に相手が引いてくれましたが、あそこで終わらなかつたらと思うと、……自分が情けなくなります」

「死にかけたのだ」

無理もない、という響きを込めて、景勝がつぶやく。

今、こうやって生きているのは兼続の生命力が強かったからであり、決して傷の位置が良かったからではなかった。

突き出されたナイフの切っ先は肺をえぐっており、生死の境をさまようこと、実に十日間——。医者すらも言葉を無くした沈黙の末、兼続は奇跡的に目を開いた。

ふと、兼続は何かに気づいて視線を落とし、右手から左手を外す。

震えが止まっていた。

「……与六」

決して消えない傷を癒すようにしばらく押さえてから、景勝が手を外した。その手で兼続の髪を軽く搔き上げて頭を撫でる。幼い子供にするように、昔、長尾家——景勝の旧姓——に来たばかりで、怯えていた兼続にしてやったように丁寧に撫でた。

「もう無茶はするな」

「——」

いきなりの景勝の行動に、兼続は驚いて動きを止めたが、嬉しさの混じったくすぐったそうな表情でうつむいた。懐かしさがこみ上げてきて口端を噛む。しばらくして景勝が手を離すと同時に、兼続は素早く立ち上がった。

慶次は我に返った。

どうやら話が終わったらしい。

兼続が立ち上がり、聞こえないほどの小声のやりとりのあと、高校生の顔がこちらを向いた。どうも思わぬ会話について聞き入っていたらしい。逃げるにもこの茂みでは音がするし、何よりも慶次の身体の大きさだと立ち去る前に間違いなく見つけられてしまうだろう。

動きようが無くなって、慶次はその場でため息を漏らした。

——こいつは天罰か。

前髪をひょいっと搔き上げて苦笑を浮かべる。

困り切ってさ迷わせた視線が、こちらに歩いてくる兼続の視線と合った。

兼続は驚きを露わに瞠目したあと、「こんなところに居たのか」と歯切れ良く口にしながら歩き寄ってくる。慶次はばつの悪そうな顔でひょいっと肩をすくめた。

「悪い。立ち聞きするつもりはなかったんだ」

「……今のを聞いてしまったのか？」

怒り狂うかと思ってまず謝った慶次の前で、なぜか兼続は照れの混じった苦笑を浮かべ、逃げるようにして恥の籠もった眼差しを慶次から外した。いつもより幾分か小さな声で続ける。

「その、……慶次、出来れば忘れてくれないか？ 今の話」

「……——」

「本当に、恥ずかしいばかりなんだが」

慶次は思わぬことに啞然とする。兼続は本気で恥じ入っているようで、怒りなど欠片も見せずにうつむいた顔を赤くしていた。

「いや、この場合、明らかに立ち聞きしていた俺が悪いんじゃないかな」

ともすがに言い出せず、言葉を失った慶次に、「先に戻る」と兼続は言い置いてさっさと中庭の方に向かって歩き出してしまった。呆気にとられた慶次はしばらく立ちつくして、草の茂みが揺れる音に、目を瞬かせる。

景勝が立っていた。

木を押しのけた姿のまま、兼続が立ち去った方へ眼差しを向けている。かと思えば顔をずらしてじっと慶次へ訝りの眼差しを注ぎ、呟くように漏らした。

「……聞いたのか」

「あ、ああ……、悪い。そんな気はなかったんだが、つい耳に入っちゃってね。それで、——その、なんだなあ」

まだ驚きは完全に抜けていないらしい。自分が何を言っているのか、言いたいのかわからなくなって、慶次は拍子抜けしたまま自分の頭を撫でた。景勝はそんな慶次をまだ見つめていたが、やがておもむろに視線を外し、軽くあごを引いてみせる。すべて承知した、と言いたげなうなずきだった。

なんだかほっとして、慶次は肺の底から息を吐き出した。

「悪いな、ホント。兼続を捜してたら、……いや、立ち聞きしたようなもんなんだが」

素直に吐露しても景勝は責める顔もせず軽くうなずきだけだった。口を開く気配はない。けどこの御仁、実はけっこう喋るんだなと認識を新たにしながら、慶次は高校生が立ち去った方にちらりと視線を流す。

「俺はよそ者だから、こいつを聞いていいのかわからないんだが……、なあ、なんで兼続の奴、あんなに徳川を嫌ってるんだ？」

「——」

「いや……、言いたくなきゃ、いいんだが」

立ち聞きしたという罪悪感がつい態度を卑屈なものにさせる。とりあず聞いてみて、景勝の反応が思わしくなかったので慶次はすぐにそう付け加え、「景勝のこと、俺苦手だっけ？」なんて思いながら再びのため息。

すぐに立ち去るだろうと思いつつ、ポケットに手を突っ込んで横を向いていた慶次は、景勝がいつまでもその場から動かないことに気づき、目を戻した。

じっと足下を見つめて、景勝は顔を上げる。

くるりときびすを返した。

まあ、それが正しい反応だろうな、と諦め混じりにあごを撫でた慶次が見送る前で、今度も何の前触れもなく景勝が振り返る。

半身を開いたまま、真っ直ぐに慶次の目を見た。

「俺の父を殺したからだ」

「！」

またもすぐに背を向けて、景勝はまるで何事もなかったかのように、規則正しい歩調で歩き去っていった。

慶次は愕然とその背中を見送る。

——俺の父を殺したからだ。

その一言が何を意味するのか、慶次にはよく理解できた。

長尾(ながお)政景(まさかげ)。

それが上杉景勝の実父の名だ。

現在の上杉組組長、上杉謙信の姉である仙桃院をめぐった強者で、現在の筆頭とされる直江組よりもさらに広い縄張りとお金力を持っていた。いささか野心が強く、不惑近くまで親分格に当たる謙信ともいざこざが絶えなかったが、長男——つまり景勝の兄——が野尻湖で溺死してからはめっきり大人しくなり、謙信に背くこともなかった。

だが六年ほど前、突如として、自宅の寝室で殺害される。

あまりに突然のことに、謙信ですら政景の縄張りを守りきることが出来ず、縄張りの大半を織田連合に属する下部組織に奪われた。

もちろん政景の部下が抵抗したため激しい闘争になり、謙信は景勝の命の危険を感じて自らのもとに引き取り、三ヶ月後に正式に養子に迎えているが、その景勝こそ、父、政景の第一発見者だったという。

——景勝は犯人を知っている。

そんな噂も流れた。

しかし、政景殺害の一件は誰もが予想もしなかった落着をみる。

織田連合の下部組織、明智会(あけちかい)が突如として、同格に当たる羽柴組(はしばぐみ)が犯人であると名指ししたのだった。どうやら以前からの対立が表に出たものらしいが、おかげで羽柴組は政景の部下たちに狙い打ちされるようになり、死者は出なかったが数名が重傷を負うことになる。

幾度も命を狙われるに到り、また織田連合の織田(おだ)信長(のぶなが)に自らの潔白を信じて貰えなかった羽柴組の組長、羽柴(はしば)秀吉(ひでよし)は事件より三ヶ月後、思わぬ動きに出た。

上杉謙信に自らの無罪を訴え出たのだ。

当惑した謙信はまず秀吉を自らの屋敷に匿うと、あらゆる方法で調べ尽くして秀吉の無罪を知り、政景の部下たちに追うことを禁ずる命令を出した。

現在の良好な関係の通り、羽柴組は完全に織田連合と切れて上杉組とつながり、事態は一応の落着を見るが、うやむやの間に真犯人の影は薄れ、隠されてしまう。

犯人は未だに捕まっていない。

今でも時折、景勝は謙信から外出禁止を命じられるが、どうも裏には父親の殺害が関わっているようだった。

——長尾政景を殺したのが徳川会、なのか。

慶次はとっくりと思案に暮れながらその場に立ち尽くしていた。

一方では、政景は徳川会を通して織田連合につながぎを取ろうとして謙信に殺されたのだとか、いや、武田につながっていたから殺されたのだという噂も流れていたが、いずれも噂の域を出ない。

政景の息子である景勝を養子にしたことが、謙信が犯人である、という説を否定する強力な理由になっていた。

とはいえ、景勝と出会った当初、慶次は「養父が実父を殺したせいで景勝は無口なんじゃないか」と思わず勘ぐってしまったが、こうなってくると——、話は、だいぶ変わる。

景勝は父を殺した犯人を知っている。

そうなれば当然、謙信が知っていてもおかしくはないが、あの正義感の強い謙信が知っていて見過ごすことはあり得ない。つまりは知らないのだろう。

なぜ景勝は言わないのか。

なぜ、徳川会は政景を殺したのか。

どうして景勝は知っているのか……。

くらりとめまいがするまで深々と考え込んで、慶次はかすかに熱を帯びてきた額を押さえ、眉根を寄せる。いかん、熱が出てきた。二十四歳の大学生はしかめっ面でぶんぶんっとあたまを振る。

誰にも言っていないが、実は考えすぎると熱を出す体質なのだ。

まあ、大概はするっとどうにかなってしまうので滅多にないが、こういったことになるについで、考え込んでしまう——考え過ぎてしまう。熱でくらくらするあたまを押さえ、慶次は苦笑と入り交じった複雑な笑みを浮かべた。

何かが起こるかも知れない。

予感がする。

それも、嫌な予感が。

こういう予感は外れねえんだよなとぶつくさ漏らして、慶次は苦虫を噛み潰したような顔に悲しみも乗せて、空を仰いだ。

星の一つもない。

ただ、灰色の深みがそこにあるだけだった。

「慶次に会わなかったか？」

人々が思い思いに佇む最中、どうにか見つけた三成のもとへ歩み寄った兼続はいきなりそう問いかけて、先ほどのことを思い出し、思わず頬を紅潮させた。

——まさかあの話を聞かれているなんて思わなかった。

慶次はどう思っただろう？

女々しい奴とでも思っただろうか……。

だとしたら嫌われても致し方ないかなと思って、兼続は次いで、顔をしかめた。そんなことで慶次が自分を嫌うとは思えないが、もしもということもある。

あとで慶次に聞いてみようか、いや、このまま流してしまおうかなと思案を続けた兼続は、いきなり腕を掴まれて我に返った。

三成が眦も鋭く、睨んでいる。

「慶次に会ったのか？」

「あ、その、……会ったと言えば会ったが、先に戻ってきてしまった。あとから来るとは思うが」

「そうなのか……？」

手を離しつつ、三成は怪訝そうに兼続の顔を見つめる。なんで慶次の名前を出しただけで兼続が赤くなるのか、よくわからなかった。胡乱げな眼差しでわずかに背を反らす。

「どうした、慶次に手でも出されたのか？」

兼続がぼかんと口を開けた。

「なんだった？」

「いや、何でもなし。気にするな」三成はさっと手を挙げて、自分で振った話題を遠ざけ、「景勝どのには会えたのか？」

「あ、ああ……、少しだが、話をしてきた」急に表情が和らいで、照れたように笑う。「無茶をするなど、言われてしまった」

あくまでも居候という立場を通すためなのだろう、制服姿の兼続を何とはなしに見ながら、三成は「無口で有名な景勝どのと話をした、ねえ……」と内心で漏らしつつ、どこかでほっとしていた。先ほどまでの思い詰めた雰囲気が消えていつもの「樋口兼続」に戻っている。

「当然だな。自分の立場も考えろ」

ウェイトレスの盆からウーロン茶を取って、手渡してやった。

少しだけ口に含んだ兼続は、ふと何かを言いたげに目を上げたが、少し首をかしげ、無言のまま再びグラスを唇に当てる。煽るように一気に飲み干すと、肩を落とすようなため息を零して軽く唇を噛んだ。

上杉家の居候はぼんやりとした遠い眼差しを近くの庭石に当てる。

庭師が慎重に石を組んだ庭石は大きくもなく小さくもなく、絶妙なバランスで大きな庭園を形作っていた。

「……わたしは、望んではいけないことを望んでいるのかも知れない」

柔らかいがさぎ波のように揺れる声がぽつんと、落ちる。

三成は改めて目を向けた。

グラスを持って余しつつ、兼続が物憂げな目を伏せる。

「誰の為にもならない、誰を助けるわけでもない、ただ独り、わたしだけが望んでいること——」

。そんなことをすべきではないと心の底ではわかっているのに、我慢できず、叫んでしまいたい時がある」

口端に笑みが浮かぶ。

出会ってから初めて目にする、自嘲的な笑みだった。

「行いを正そうとする義憤から望むんじゃない。ただわたし個人が許せないから望むんだ。しかも本来ならわたしが望むべきことじゃない。そのことだってわかってる。……わかっていたって、納得できないから、……わたしは自分を止められない」

「——」

「わたしは、愚かなんだ」

兼続が何を言っているのか三成にはまったくわからなかったが、心に不安を呼び起こす言葉だった。怪訝さに自然と眼差しがきつくなる。口を噤んだ兼続は慣れた仕草でグラスをウェーターに託すと、身体の向きを変え、真っ直ぐに三成を見た。

硬い表情が崩れて困った笑みになる。

「許してくれ、三成」

「……お前は」

いきなり我に返って、三成は息を吸い込み、そこで止めた。申し訳なさそうな笑みを見ているうちに謝罪の意味が飲み込めてくる。

「わかっているならそんな不安がらせるようなことを言うな、馬鹿者め」

思わず肩の辺りを軽く殴ると、兼続は笑いながら「だから謝ったんだ」と言って避けるように逃げる。怒った顔を作った三成はさらに踏み込んで腹の辺りを小突くように拳を出した。

「わざとだとしたらお前は最低な奴だ、兼続」

「まさか、そんな気はなかったよ」

そうやって返す兼続の顔は「もちろん確信犯だ」と言っているようだった。三成は「人をからかうな」と声を上げようとして、真後ろから包み込むようにがばっと抱きつかれ、「うわ！」とらしくない悲鳴を上げる。

硬直した三成の頭上を見やっ、兼続がきょとんと目を瞬いた。

「どうしたんだ、慶次」

「じゃれてるとこ悪いなー兼続、謙信公が呼んでるぜ。この御仁と一緒に」

「は、な、せ！」

「あんた痩せてるな、もうちょっと食べろよ。でないとでかくなれないぜ」

顔を真っ赤にして叫ぶ三成を解放した慶次は、わざとらしい心配そうな顔で忠告する。羽柴家の居候はますます怒りを露わにした。

「余計なお世話だ！ お前みたいにでかくなってたまるかっ！」

はっはっは、と慶次の高笑い。

「でかいといいぞー。棚の上のものが簡単に取れる」

「何を着ても映えるし、武道の型を披露してもとても美しく見える。本当にうらやましい限りだ」

うんうん、とうなずく兼続に慶次の悪ふざけに乗ったわざとらしさはない。反射的に「ふざけるな」と怒鳴ろうとして、それに気づいた三成は言葉に詰まり、苛立ちの全てを眼差しに込めて慶次を睨み付けた。

すると、すでに兼続の後ろに避難していた慶次がにやっ、と笑い、茶目っ気たっぷりに片目を閉じて見せる。

「あんた、面白すぎるよ」

もちろん三成が大声で抗議したのは言うまでもない。

小鳥が鳴いている。

雀。

ぼんやりと目を開いた石田三成は、どこかで鳴っている目覚まし時計を止めようと手を伸ばして、べたりと冷たい何かを叩き、思わず動きを止めた。さわさわと触るそれは明らかに畳で、それもひどく新しい気がする。

なんだこれ。

一瞬で眠気が吹っ飛び、がばっと起き上がった三成は、十畳以上もある部屋に独りで寝かされていたことに気づいて呆然とした。

「……どこだ、ここは」

枕元には盆にのせられた水差しとグラス。

携帯電話。財布。小銭入れ。

ずるりと視線をずらせば、自分の腹もと、目にも鮮やかな朱の帯が目に入った。どういうわけだか身体にぴったりの藍色の浴衣を着ている。寝起きなので、いささか着崩れてはいるが。

細格子のある窓の外には快晴の空が広がっていた。

——どうなってんだ？ これ。

「おはよう、三成」

するするとふすまが開き、廊下に膝を突いた兼続がさわやかに、朝の挨拶を口にした。こちらはきっちりと学校の制服を着ている。思わず「ああ、おはよう」と返した三成の前で、一礼した兼続は室内に入ってくると、行儀に乗っ取ってきちんと襖を閉める。

まさに作法通り。

三成は寝乱れた髪を我知らず撫でつけ、傍らに座る兼続を見た。

「……お前、確か仙桃院さまに作法を習ったんだよな」

「そうだが？ なにかおかしかったかな」

「いや、何でもない」

兼続はいつものようにこやかに微笑んだ。

「よく寝られたか？ 昨晚は少し冷えたからな、この部屋だったら寒かったかも知れない」

「……ここは上杉の屋敷か」

「ああ。どうせならわたしの部屋に泊めようかと思ったんだが、部屋中本だらけで、片付けるのに時間がかかりそうだったので、謙信公の言葉に甘えてこちらにしてもらったんだ。少し驚いたかも知れないが」

確かに部屋の中の空気は冷え冷えとしていて、三成は思わず布団をたぐり寄せせる。

「ああ、驚いた。なんで俺は泊まったんだ？」

「——本当に覚えてないのか」

「まったく。確か、謙信公に呼ばれて、部屋に上がらせてもらって……、そこに」

脳裏に、いきなり華やかな笑顔が浮かんで、三成は言葉を呑んだ。

兼続が少しばかり同情的な笑みを作る。

「ちょっと、相手が悪かったな」

「やった！ 兼続だあ～！」

謙信から許しが出た『魔王』が回されて少し。

芋焼酎とは思えないフルーティな薫りと味にそれぞれが舌鼓を打っていた最中、突然舌足らずの愛らしい声が上がり、男ばかりで飲んでいた三成と兼続、慶次や景勝はぎょっと振り返った。

ふすまを開き、淡いピンク色の服を着た少女が喜びに顔を輝かせながら立っていた。彼女はこっと全員に向けて微笑むなり、足取りも軽く走って兼続にぴょんっと抱きつく。

「久しぶり！ 兼続っ 元気だった〜？」

「……華美(はなみ)さま」

「華美」

兼続と景勝が同時に名を呼んで、前者は驚き一色に染まっているのに対し、後者はほんのわずかだけ、渋い顔になった。

すると上杉(うえすぎ)華美(はなみ)はいまだ兼続に抱きついたまま、実の兄に目をやって「別に怒らなくても良いでしょ、お兄ちゃん」と少し高い声でなだめる。かすかに眉を上げた景勝は妹から目をずらし、廊下に立ったままの義理の兄に向けた。

「間に合いましたか」

「どうにか、な」

うなずいた上杉景虎は上品な仕立ての背広姿だったが、その直ぐ傍らに、尼僧姿の女性が立っていた。

誰なのかは説明されずとも知れる。

我に返った三成と慶次が慌てて姿勢を正そうとすると、女性は手を挙げて止め、「どうぞそのまま」で鈴を転がすような声で言った。

その時になってようやく、一輪の赤い椿が添えられた丸窓、その傍らに佇んでいた謙信がのそりと身体の向きを変えた。

「姉上、一杯いかがですか」

「……またそのように立ったまま飲んで。あなたは酒に関してだけは行儀悪いのですから」

姉の言葉にも、謙信はははっと笑ってみせるだけ。

仙桃院は兼続に抱きつく娘に目をやった。

「華美、止めなさい。兼続が困っているでしょう」

「……久々に会えたのに」

つぶやく華美を宥めるように、兼続が腕を軽く叩いた。

「このところ病院に顔を出しにいけないで申し訳ありませんでした、華美さま。お会いできて嬉しいです」

「あたしも嬉しい」

にこっと微笑む華美に戸惑いを隠せないのが三成だった。慶次は何度か会ったことがあるものの、三成はもちろん初めて(噂の)「上杉華美」を見たのだ。どうにか隠せていたが、ほとんど口を開けんばかりに驚いていた。

——これでホントに一児の母……、いや、二十歳なのか？ どう見たって高校生じゃないか……。

兼続から身を離れた華美は、直ぐ傍らに座っていた三成に気づき、かすかに首をかしげる。グラスを置いた兼続が素早く立ち上がった。

「三成、こちらは若さまの奥様で、上杉華美さまだ。華美さま、こちらは羽柴家に居候をしている、石田三成です。学校ではわたしと同じクラスです」

目の大きな華美はどこまでも兄と母親に似ていなかった。かといって父親の血が入っている風

情でもない。まだどこことなく幼さの残る愛らしい顔に満面の笑みを浮かべて、華美はゆっくりと頭を下げた。

「初めまして。上杉華美です」

「……初めてお目にかかります、石田三成です」

「よろしく」

「俺のこともよろしく頼むな、三成。上杉景虎だ」

にやっと笑って割り込んできた景虎は無造作に握手を求め、手を握ってもらうと素早く引っ込んで兼続のグラスを手にした。勝手に拝借したグラスに駆けつけ一杯といわんばかりに『魔王』を手酌で注ぎ、一気に飲み干す。

「うわあ～～、確かにうまいな、この酒ッ」

兼続が愕然とした。

「ちょ、若さま！ 本当に飲んだんですかお酒！」

「おう飲んだぞ」

「あれほど酒はいけないと言っているのに！ わかってるんですか！？ あなたは——」

「まあまあ固いことを言うな、高校生。ほら、飲め。飲め飲め飲め！」

ほんの少し顔を赤くした景虎はいきなり兼続の襟首を掴み、その口元に酒瓶の口を押しつけた。さすがの兼続も慌てる。

「わ、か、さま！ それはいくらなんでも無理——」

「お前なら飲める、いける！ 飲め樋口兼続ッ」

「——」

止めてください、と叫ぶ兼続に、無言のまま止めに入った景勝、そんな義兄弟と家族同然の居候を上杉家の姉弟(きょうだい)が微笑みながら見守っていた。

「まあ、仲の良いこと」

「まったくだ」

いや、それは無理がある、と心中で叫んだのはたぶん三成と慶次だったが、やがて景虎の狙いが自分に向けられるにつけ、姉弟の言葉に抗議する時間も与えられなかった。

景虎は飲ませ魔。

一時間後、見事に潰した三成を前に、景虎がにんまりと笑っていた。

「……俺は潰されたのか」

徐々に戻ってきた記憶におまけで頭痛がついてきた。ずきずきと痛む額を押さえ、三成はぐったりと布団の上に突っ伏す。兼続が正座したまま申し訳そうに眉を下げた。

「どうやってもあの癖だけは直らないんだ、若さまは。わたしも昔はよく潰されたが、この頃はどうか耐えられるようになった。どうも若さまはそれが面白くないらしくてな……」

「代わりに俺か」

「そう言うことになってしまったな、すまない」

「頭を下げるな。どう考えたって悪いのはお前じゃない」

「朝食……、食べられそうか？」

控えめな問いに大きくなずいて、三成は布団から出た。

「さすがに二日酔いで休むわけにもいかないだろう。何から何まで世話になってすまんが、朝食も頼む」

「無理はするなよ」

どうやら三成が潰された話は屋敷の端から端まで伝わっていたらしく、三成の膳に出てきたのは粥だった。紀州の梅も添えられている。ちょっと複雑な思いでいただき、手を合わせた三成のもとへ、羽柴組から制服が届けられた。

手書きのメモも添えられている。

——三成へ ちゃんと起きた？ 学校ははきちんと行きなさいよ。できたら学校に行く前に電話ちょうだいね。 ねね

妙に気恥ずかしく思いながら制服に腕を通し、着ていた背広は袋に詰めてもらって、兼続が景虎——自分も二日酔いで、ほとんど目も開いていなかったらしいが——と景勝に挨拶するのを待って、上杉組の本家を出た。

玄関から門までの道のりを歩きながら、ふと兼続が振り返る。

大きく手を振った。

「景勝さまー、行ってきまーす！」

ちょうど玄関から出てきたばかりの景勝が顔を上げる。リュックを右肩に背負い、これから大学へ行くとおぼしき学生はかすかに微笑み、軽く手を振って返してきた。

「甲斐の若虎」編 終了